

41790

教科書文庫

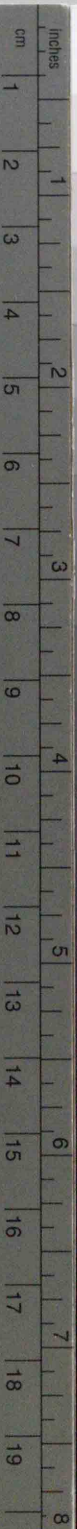
4
810
41-1931
200030 2008

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Fu26  
資料室

國文  
新制第一版  
卷十

資 料 室

濟 定 檢 省 部 文

用 科 文 漢 語 國 校 學 中    日 十 二 月 十 年 六 和 昭

編 部 輯 編 房 山 富

# 文 國

版 一 第 制 新



田 神 房 山 富 京 東

375.9  
Fu 26

富 山 房 編 輯 部

# 國 文

版 一 第 制 新

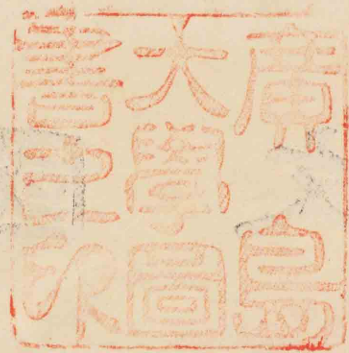


東 京 富 山 房 神 田



みちのべの清水

山川永雅筆



國文 卷十 目次

一	學生への忠言……………	阿部次郎…一
	科學と人生(自修文)……………	永井 潛…二
二	法成寺の造營……………	(榮華物語)…七
三	東路の旅……………	(東關紀行)…三
四	かぐや姫の昇天その一……………	(竹取物語)…六
五	かぐや姫の昇天その二……………	(竹取物語)…三
六	初雁を聞く辭……………	加藤千蔭…三
七	芳宜園大人の靈を祭る……………	村田春海…三
八	夜なが(俳句新調)……………	…三
九	言靈の幸はふ國……………	別所梅之助…四

〇	萬葉時代の歌人	新保磐次	五
一	萬葉集の歌		五
二	長生殿(朗詠)		三
三	羽衣	(謠曲)	五
四	藝術と人生	横山有策	七
五	藝術の表現(自修文)	厨川白村	七
六	海の文藝	笹川臨風	八
七	古事記より	太安萬侶	八
八	古事記を通じて見た我が祖先の生活	相馬御風	九
九	須磨の浦波	紫式部	一〇
一〇	都がへり	紀貫之	一一
一一	一 別離		一一
一二	二 海路		一一

三	三 都がへり		一四
四	三 上古及び奈良平安時代の文學		一六
五	三 鎌倉室町時代の文學		二六
六	三 江戸時代の文學		三七
七	三 明治以降の文學		四一



(一) 哲學者。東北  
帝國大學教授。  
山形縣の人。  
明治十六年生。

調整

具體的  
且秩序的

國文 卷十

ちよるのいそりもあそん  
しよるのいそりもあそん  
しよるのいそりもあそん  
しよるのいそりもあそん  
しよるのいそりもあそん  
しよるのいそりもあそん  
しよるのいそりもあそん  
しよるのいそりもあそん  
しよるのいそりもあそん  
しよるのいそりもあそん

一 學生への忠言

阿部次郎

自分はすべての人に勧めるに、その生活の中心をこしらへる事を以てしたい。その中心を中心として、日々の生活を調整する事を以てしたい。若しその中心を発見する事が容易でないならば、自分は生活の中心を求める事を以て、それまでの生活の中心とする事を勧めたい。

諸子が學校にゐる間は、學校の課程が外部的ながら諸子の生活に一種の中心を與へてゐる。諸子は、諸子の生活を調整すべき具體的秩序を手近に持つてゐる。随つて、たとひ學校をつまらないものと見る人々でも、尙これに

束縛

よつて、自分の生活に一種の具體的内容の與へられてゐる事は、争ふ事は出來ないであらう。しかし、諸子が學校を卒業して、授業時間や、課題や練習や、試験の束縛を脱れる時、諸子はまた一方に、何となく日々の生活に具體的内容を缺いて、退屈と空虚とを覺える事を禁じ得ないであらう。學校に代つて諸子の生活の中心となる物が、直ちには諸子の手に落ちて來ないであらう。多くの人は學校を卒業すると共に、何かをしなければならぬ義務を他人から負はされるか、若しくは自らの感情のうちに負ふのを常とする。しかし、今日の社會は、我等の卒業を待受けてゐて、直ちに我等に適當な活動の地を與へる様な社會ではない。さうして、自ら活動の地を造り出すうとするにも、我等は自己の内面に確かさの自信を缺き、我等の働きかけるべき社會に對する適當な知識を缺いてゐるが故に、内外兩様の意味に於て、どこから手をつけていゝか、わからなくなる。

かくて焦躁と空虚と、この二つの相反した様で相近似した感情は、手を携へて我等の生活に迫つてくる。さうして我等はあせればあせる程、益々生活の中心を失つた感じに捉はれなければならぬ。自分は學校を卒業すると、直ちにこの病に捉はれて、學校卒業後の二三年は、まるで何事も手につかなかつた。さうして、この状態を脱却するまでには、自分としては堪難い程の忍耐と節制とを積まなければならなかつた。故に自分は、卒業を目前に控へた諸子に對しても、特にこの點に關する注意を請はなければならぬ。

凡そ人生は短く、人生は長い。爲すべき物を持つてゐる者には、六七十年の歲月は須臾にして流れ去るであらう。しかし、何事にも倦んだ心に取つては、五十年の壽命も、長い退屈な旅と思はれるに違ないのである。さうしてこの短い生涯を空過しない爲にも、この長い一生を退屈せず暮す爲にも、我等には生活の中心が必要であ

る。自分は中心を缺いた生活のうちにある充實と幸福とを考へる事が出来ない。

そこで我等の問題は更に一步を進めていかにして生活の中心を發見すべきかといふ事に移る。この問題に對する解答もまた固より容易ではないが、自分には、その具體的方法として一つの考案がある。

と言つても、それは何も珍しい事ではない。最も自分に適しさうな人を選んで、その人の内面的發展を精細に跡付け、その通つた路を自分も内面的に通つて見る事である。約言すれば、自らその師を擇んで、自己の鍛鍊をその師に託する事である。師の奴隸とならずに、しかも師に信賴して、常に師に照して、自己を發見する途を進める事である。

自分は自分たちの受けて來た纏りのない教育と、徒に漠然とし

(一)長野縣下水内郡飯山町  
(二)臨濟宗の高僧駿河の人。明和五年(一八四四年)寂。  
(三)長野縣下高井郡飯山町の



た廣い知識とを思ふ毎に、古人の受けた鍛鍊と訓育とを羨ましいと思ふ。自分はこの春、信濃の飯山(一)に行つて、白隱和尚修業の地なる

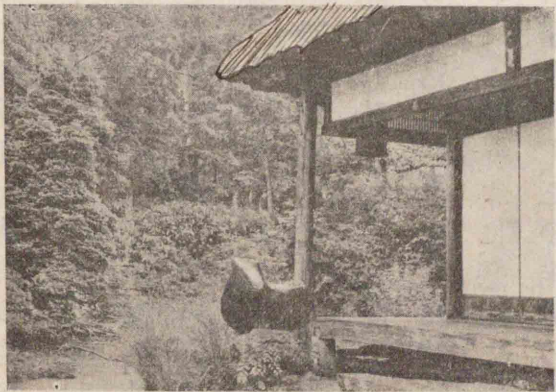
正受庵を訪うた。庵は高社(三)の山を望み、千曲川を望む小丘の上にあつて、杉の老樹の生繁つた幽邃な境にある。初め白隱が慧端和尚をこの庵に訪うた時、慧端は白隱を崖から蹴落したさうだ。白隱はそれにも懲りずに、慧端に師事

したさうだ。さうして或日白隱が一つの悟を得て、その坐禪の座から彼は戸外の石上に坐して工夫を積んだといふ事である。歸つてくる時に、慧端は縁の端に出て、遠くから手招をしながら、白隱を歡



迎したさうだ。

自分はその話を聞いて、白隠と慧端との間が羨ましくてならなかつた。自分にも、自分を崖から蹴落してくれる師匠、縁側から自分を手招きしてくれる師匠がゐたら、どんなに幸福な事であらう。師弟とは、與へられるだけ與へ、受けられるだけ受けんとする二箇の獨立せる、しかも相互に深く信賴せる靈魂の關係である。弟子をその個性のまゝに一人の「人」とする所に、師の師たる所以があり、その稟性に隨つて、一箇の獨立せる人格となる所に、弟子の最も多くその師に負ふ所以がある。道ミチの傳統は何等かの意



正受庵

味に於ける師弟の關係を経て、始めて内面的に生きるのである。

固より師に就く事は、自分の生活内容を、その師の供給に仰ぐといふ事ではない。我等が愛し、憎み、努め、怒る心は、我等が我等自身のうちに豫め持つてゐなければならぬ所である。これ等の愛憎や喜悲は、我等の生活を刻々に新たな境涯に漂はしめ、往々にして我等の生涯を困惑と、壅塞と、彷徨と、昏迷との境に導く。この窮境を拓き、この關門を透過する努力に於て、我等は始めて「師」の忠言を必要とするに至るのである。我等が師に就いて學ぶべき所は問題の解き方である。途の切拓き方である。生活内容を流れ行かしまむべき方向である。若し我等自身のうちに、豫め生活内容を有する事なく、一定の傾向を有する事なく、解決を要する問題を有する事がないならば、師に就く事は、全然無意味でなければならぬ。故に生活の中心を求める爲に、古人の著作を研究するといふ時、我等の生活の意味

は讀書にあるのではなくて、我等の内面的知覺を開拓して、これを正しい方向に導いて行く所にある事は、繰返すまでもない事である。書を讀む事は、自ら生きる事を停止する事を意味するならば、また他人の著作を研究する事は、自ら省る事を中斷する事を意味するならば、我等は固よりいかなる場合にも、書を讀む事を、他人の思想を研究する事を、生活の中心とすべきではない。此所に讀書と言ひ、研究と言ひ、師に就くと言ふのは、自ら生き、自ら省る爲の一つの途を意味するものである事は、明瞭に記憶して置く必要がある。我等が師に就いて學ぶ事を要する第一義諦は、行住坐臥に師の言葉を讀誦する事ではなくて、何よりも先づ、師と同一の勇氣を以て、人生に衝當る事でなければならぬ。自己の直接經驗を基礎として、人生の疑に觸れ、人生の疑を解く途を求め、事でなければならぬ。

自分は今、最も自分に適しさうな人を選んで、これを師とすべき事を言つた。しかし、此所に最も自分に適する」と言ふのは、現在の自分が最も愛好する者、現在の自分が最も親しみ易い者、換言すれば、現在の自分の程度を以ても、容易に接近し得べき者と言ふ意味ではないのである。かくの如き師は、唯我等をあまやかす者、現在に於ける我等の偏局した發展を、更に一面的に偏局せしめる者に過ぎないであらう。現在の自分は、自分の本質の一切ではない。我等の本質のうちには無限の可能性がある。他日、我等の本質のうちから現在の自分には、思ひも寄らぬ花が咲出る日がない事を、誰か保證する事が出来よう。我等の師は、我等の本質のうちから、これ等の數多き可能性を引出す力があるものでなければならぬ。我等を鞭撻して、常により高い階段を望ましめる力を持つてゐる者でなければならぬ。約言すれば、我等を叱り、我等を引上げ、我等を打碎

き、我等を改造するに足る程、複雑で偉大な者でなければならぬ。この意味に於て、我等に「無理」を強ひる力のない者は、我等の師と仰ぐに値せぬ者である。

三太郎日記

自修文

科學と人生

永井 潛

行けど行けど到らぬ空を慕ひつゝ、

のぼるや人の心なるらん。

これは故大西祝博士の歌であります。人の人たる尊い所以は、眞と善と美とに憧れて、止み止まぬ心の働であります。私はこの意味に於て學者を禮讚し、宗教家を禮讚し、藝術家を禮讚せんとするのであります。眞に偉い人の偉い所以は、富貴にあらず、官爵にあらず、權勢にあらずして、この尊い心の働にあるのであります。仁義といふ聖人の語も、神は愛なり。といふ基督の教も、畢竟するに、自他の差別を超越して己の最善の努力を盡し、それに依つ

(一)生理學者、醫學博士、東京帝國大學教授、廣島縣の人、明治九年生。

(二)哲學者、倫理學者、岡山縣博士、岡山縣の人、明治三十三年歿、年三十六。

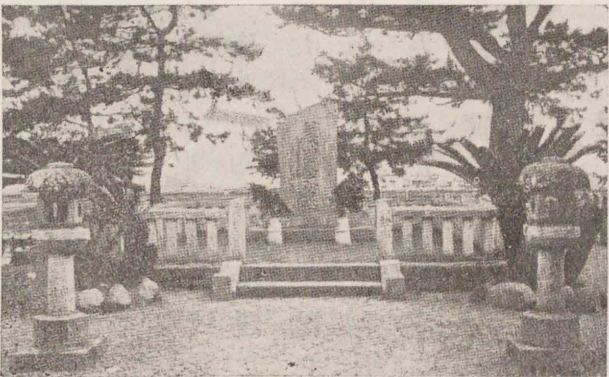
神の壇上に云  
云  
神と同じ列に  
立ち得る、即ち  
神の域に達し  
得るの意。

(一)三九二年、  
第百十四代中  
御門天皇の御  
代、徳川吉宗  
の治世。  
(二)浮塵子

て人生に貢獻する事に外ならぬのであります。眞にその心持を體得してその行を爲す時、その人は神の壇上に磨かれた人であり、たつとひ頭髮は蓬の如く亂れ、身には襤褸を纏うてゐても、絶えずその身體からは金色の光が射して、長へに人生の闇を照すのであります。腰には寸鐵を帯びないでも、百萬の甲兵も如何ともする事が出来ない偉大な力を現すのであります。

皆さん、仰いで太陽を御覽なさい。その光は普く大宇宙に行きわたつて、あらゆる物に力と命とを與へて居ります。しかも東の山から西の海へと、毎日黙々としてその行程を繰返して居ります。しめやかな春の雨につぼみは花に、芽は若葉に、地上の萬物悉く恵に蘇るのであります。しかもそれは、高い／＼雲の中から、黙として降注いで参ります。蓋し眞に偉い人は、黙々として偉い事をしてゐるのであります。

今を去る百九十餘年の昔、享保十七年に、いなごとうんかとの



愛媛縣伊豫郡松前町

謳歌 衆人が聲をそろへてその徳をたたへるこゝと

爲にひどい饑饉が四國を襲ひました。その時伊豫の國伊豫郡筒井村に百姓作兵衛といふ者があつて、一年の麥種子を持つて居りました。その父その子相ついで斃れ、死は將に彼をも見まはんとした刹那にも、彼は頑として人の勸を斥けて、つひに麥種子の囊を枕にして餓死したのであります。作兵衛には、彼自身の命よりも、やがて國人の命の糊となるべき麥種子が大切であつたのであります。伊豫の國松前に建てられた義農之碑は、黙々として、しかも最も雄辯に、日月をも貫く凜乎たる義民作兵衛の心を、永遠に謳歌してをるのであります。

義農之碑

此の碑は、  
 爲にひどい饑饉が  
 四國を襲ひました  
 時伊豫の國伊豫郡  
 筒井村に百姓作兵衛  
 といふ者があつて、  
 一年の麥種子を持つて  
 居りました。その父  
 その子相ついで斃れ、  
 死は將に彼をも見ま  
 はんとした刹那にも、  
 彼は頑として人の勸  
 を斥けて、つひに  
 麥種子の囊を枕して  
 餓死したのであり  
 ます。作兵衛には、  
 彼自身の命よりも、  
 やがて國人の命の  
 糊となるべき麥種  
 子が大切であつた  
 のであります。伊豫  
 の國松前に建てら  
 れた義農之碑は、  
 黙々として、しかも  
 最も雄辯に、日月  
 をも貫く凜乎たる  
 義民作兵衛の心を、  
 永遠に謳歌してを  
 るのであります。

麥種子を擁護せんとした義民の心、これ即ち眞理を擁護せんとする學者の精神であります。眞理こそ學者に取つての唯一の命であります。否、命よりも尊い物であります。彼は唯眞理の爲に眞理を求め、さうしてその得たる眞理によつて、未來永劫人を救ひ世を助け、さうして自らは何の得る所もなく、唯黙々として甘んじてをるのであります。螺旋や滑車は機械の基礎を爲す物で、これが爲に生産がいかに増大したか、實に測り知るべからざる物があります。しかもそれを發明した學者は、決して專賣特許に依つて彼の懷を肥してはゐないのであります。否、その名前さへも夙に忘れられてをるのであります。種痘の發明によつて、何物にも代難い可憐な人の子の生命が、永代だけ多く救はれる事でありませう。しかもその發明者たるジェンナーが、いかなる努力を以てそれを完成し得たか、いかに多くの苦心を以て、怒罵と嘲笑とに耐へなければならなかつたか、それを知る人は甚だ稀

究極  
最後の所。

功利主義  
功名利欲の  
み専一とする  
主張。

言ふべく餘り  
に云々  
明瞭すぎて言  
ふ必要がない  
利用厚生  
世の便利と生  
活とを益する  
こと。人民の  
用を利し生を  
厚くすること。

であります。

抑、學術が眞理を求めて止まぬ人間の本性から生れ出た物である以上、學術の究極の目的は、どこまでも眞理の探求でなければなりません。眞理の爲に眞理を愛し、學問の爲に學問をする事が、學者の使命でなければなりません。然るに、世には往々、功利主義、實用第一の立場から、學術の値うちを上下せんとする人がありますが、しかし、それは大なる誤解であります。固より學術の進歩發達が人生を豊富ならしめ、自然を制御し、文化を増進し、國をして富强ならしめ、人をして高尚ならしめる上に、いかに多大の貢獻を爲したか、それは言ふべく餘りに明瞭な事實であります。しかし、それだからと言つて、學術をもつて單に利用厚生之具と爲し、その研究は、全然實利實益を追うて行はれる物と斷ずるのは、眞に學術を解し、學術を愛する人の言ふべき事ではないのであります。學術に依つて知り得た理法を應用して、人

終始する  
つきてある。  
一貫してある。

〔Bologna〕  
イタリーの北部の都會。此所の大學は十一世紀に創立された。

〔Luigi〕

Galvani, イタリーの生理學者。ボロニア大學で解剖學を教授してゐた(西紀一七三七年—一七九八年)。

〔Alessandro〕

Volta, イタリーの物理學者。(西紀一七四五年—一八二七年)。

間生活の上に幾多の幸福と利益と愉悅とが惠まれる事は、勿論望ましい事でありますが、しかし、それは學術研究の自然の結果たるべき物であつて、決して究極の目的たるべき物でなく、またその動機たるべき物でもないのであります。況や、學術を種子として私利私益を圖り、聲名榮達を望まんとするが如きは、眞の學者たるべき者の最も恥とする所であります。學者の全生命は、唯「眞理」てふ二字に終始してをるのであります。この眞純な動機によつて立ち、この眞純な目的を追うて進んでこそ、始めて曇なき清淨な眞理の源泉に到達し得るのであります。

イタリーのボローナ大學の教授、ガルバーニが皮を剥いだ蛙をもつて空中電氣の實驗をなし、ついでボルタといふ物理學者がこれを追試し、遂に接觸電氣の發見となり、やがて電池が造られ、茲に電信、電話、電氣工業、電氣化學などの現代文明が、この人の世に持來されたのであります。人間の文化が地上に繁榮する

(1) Nicholas Copernicus. ドイツの天文學者。近代天文學の創設者。(西紀一五四三年)

(2) Johannes Kepler. ドイツの天文學者。いはいの法則を發見し、後のニュートンの引力説に示唆を與へた。(西紀一六三〇年)

(3) Galileo Galilei. イタリアの有名な天文學者。西紀一六四二年)

天動説 地球は宇宙の中心に位置し、日月星辰はすべて地球のまわりを運行するといふ説

限り、私たちは永遠にガルバーニやボルタに感謝しなければならぬのであります。またかのコペルニクス、ケプレル、ガリレーなどに依つて舊い天動説が顛覆され、新しい地動説がうち建てられた事は、實に近代科學の上に動かすべからざる礎を据ゑた物であります。

さりながらその事が、直接富國強兵の上に、果してどれだけの功績を擧げたでありませうか。また萬有引力説てふ大發明をなしたニュートン、及びニュートンを生んだ國民は、直接それによつて半錢の利益をも得てゐないではありませんか。否々、それ所ではない、眞理に憧れて、驕進しつゝ、ある學者に取つては、一身一家の利害得喪の如きは全然眼中にない。恰も闇黒の裡に輝く一點の光明を慕うて身を焦す蟲の様に、眞理を求めて已むに已まれぬ心の渴仰を満足すべく、學者はすべてを犠牲に供して悔いないのであります。しかも黙々として横たはるこの尊い犠牲の屍の

中から、人生を惠むべき長へに萎む事のない美しい花が咲出づるのであります。  
(科學畫報に據る)

二 法成寺の造營

今は御心地例ざまになり果てさせ給ひぬれば、御堂の事思し急がせ給ふ。攝政殿、國々までさるべき公事をばさるものにて、先づこの御堂の事を先につかうまつるべき仰言宣ふ殿の御前も、このたび生きたるは別事ならず、この願のかなふべきなめり。と宣はせて、他事なく唯御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心もとなく、日の暮るゝも口惜しう思されて、夜もすがらは山をたゝむべきやう、池を掘るべきさま、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々さまざま作りつけ、御佛はなべてのさまにやはおはします。丈六

地動説 天動説の反對で、地球の自転、公転の別が四季、昼夜といふ説。生ずるといふ。進まじく、進む。

(一) 法成寺。寛仁三年(一〇六七年)建立。道長(長)の京(京都)都(都)皇(皇)宮(宮)の東(東)隣(隣)に在(在)る。藤原頼通(藤原頼通)の長(長)子(子)と(と)い(い)ふ(ふ)。承(承)安(安)元(元)年(年)一(一)月(月)廿(廿)二(二)日(日)に(に)歿(歿)す。年(年)七(七)十(十)三(三)。

馬道  
厚板の敷き  
通行の路

國文卷十

渡殿 木ッ敷  
大とつごもる

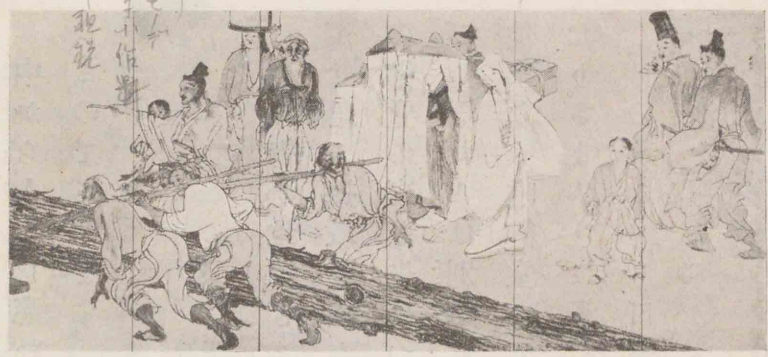
御封  
御莊

かーこー  
おそふ  
おそふ

つかあ

能行  
着強  
勤行

おお



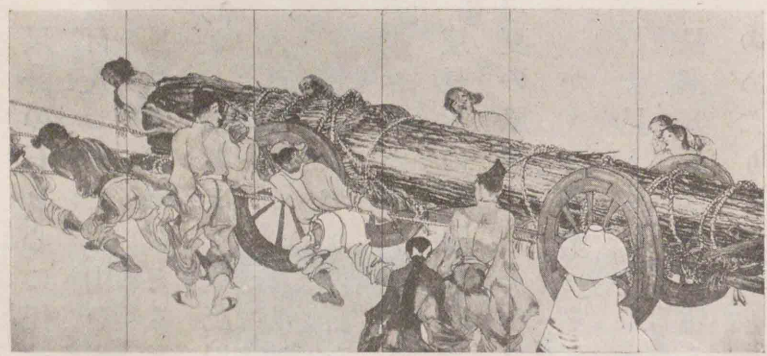
棟 木 (尾竹竹坡筆)

の金色の佛を、數も知らず作りなめ、そなたをば北南と馬道をあけて、道をと、のへ作らせ給ひて、廊渡殿數多く作らせ給ふに、雞の鳴くも久しく思され、宵曉の御行ひも怠らず、安きいも大とのごもらず、唯この御堂の事のみ深く御心にしませ給へり。  
日々多くの人々参り罷で立ちこむ。さるべき殿ばらを始め奉りて、宮々の御封御莊どもより、一日に五六百人千人の夫どもを奉るにも、人の數多かる事をば、かしこき事に思したち、國々の守ども、地子官物はおそなはれども、只今はこの御堂の夫役材木、檜皮瓦など多く参らする事を、我も我もと

Yushikohri  
Fakahaku

御封、御莊  
勤功、應を賜うらみ  
田祖、半方、角、洞、金、敷

(木賊)  
紙草



棟 木 (尾竹竹坡筆)

競ひつかうまつる。大方、近きも遠きも参りこみて、品々方々、あたり／＼につかうまつる。  
或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人許並みゐてつかうまつる。同じくは、これこそめでたけれと見ゆ、御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人登りゐて、大きな木どもには、太き綱をつけて、聲を合せて、えさまさと引上げ騒ぐ。御堂の内を見れば、佛の御座作り輝かす。板敷を見れば、とくさ、むくの葉などして、四五十人、手毎に並みゐて磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども、數を盡したり。また年老いたる翁などの、三

二 法成寺の造營

くは  
はもと  
木村

(釋)

(一)釋迦在世時代  
の中天竺舍衛  
國の富豪蘇  
達多ともいふ。

尺許の石を、心に任せて切りと、のふるもあり。池を掘るとして四五  
 百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼりたち、また大路の方を  
 見れば、力車にえも言はぬ大木どもに綱をつけて、叫びの、しり引  
 きもてのぼる。賀茂川の方を見れば、いかだといふ物に、くれ材木を  
 入れて、棹さして心地よげに謠ひの、しりてもてのぼるめり。磐石  
 といふばかりの石を、はかなきいかだに載せて率てくれど沈まず。  
 すべていろ／＼さま／＼、いひ盡し、まねびやるべき方なし。かの須  
 達長者の祇園精舎造りけんも、かくやありけんと思ゆるを、冬の室  
 夏の風、各こと／＼なり。

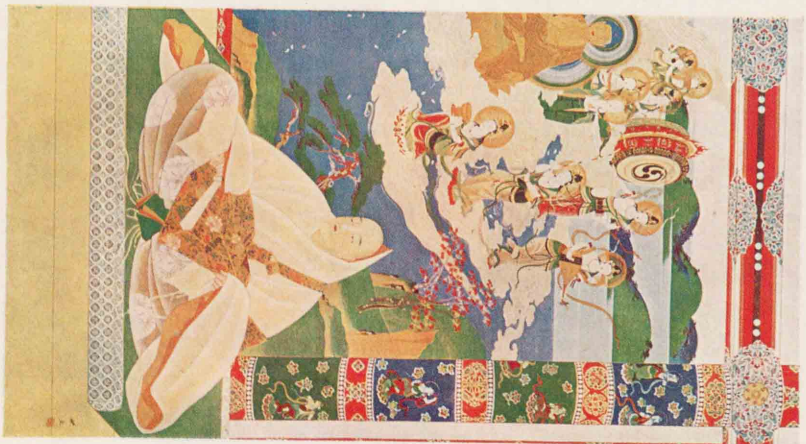
かゝる御勢にそへて、入道させ給ひて後は、いとゞ勝らせ給へ  
 りと見えさせ給ふにも、尙なべてならざりける御有様かなと、近う  
 見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜み参らす。今はこの御堂  
 のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたさまに

釋迦尊



華正映岡松

松岡映華正



白關堂御



白關堂御



(一)新義真言宗豊山派の本山。奈良縣磯城郡初瀬町に在る。  
 (二)天王寺の略稱。聖德太子の創建。天台大寺。大阪市天王寺區にある。  
 (三)昔八月廿一日に諸國の牧場から眞進した馬を天眞に南殿で御覽になさる儀。式紀に於て之の歌に「紀貫之の影見くわたり今やひくるといふのがある。」  
 (四)支那戰國時代孟嘗君の故事。「遊子猶行」於殘月。函谷雞鳴集。(和漢朗詠集)賈島。

赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂の物をもて運ばせ、河も水澄みて、快く浮べもて参ると見ゆ。尙なべてこの世の事とは見えさせ給はず。先づは、先年に長谷寺(一)にある僧の御祈禱をいみじうして寝たりける夢に、大いにいかめしき男の出で来て、何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆の爲に生れ給へるなり。とぞ見えさせ給ひける。また天王寺(二)の聖德太子の御日記には、王城(三)より東に、佛法弘めん人を我と知れ。とこそは書置かせ給ふなれ。何れにても、おろそかならぬ御事なり。 — 榮華物語 —

三 東路の旅

東山のほとりなるすみかを出でて、逢坂の關(四)うち過ぐる程に、駒(三)ひきわたる望月の頃もやう／＼、近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿著鳥(四)かすかにおとづれて、遊子(四)なほ

三 東路の旅

三

残月に行きけん函谷の有様思ひ出でらる。昔蟬丸と言ひける世捨人、この關のほとりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を弾きて心を澄し、やまと歌を詠じておもひを述べけり。嵐の風烈しきをわびつゝぞ過しける。

いにしへの藁屋の床のあたりまで

こゝろをとむるあふさかの關

關山を過ぎぬれば、打出濱、粟津原など聞けども、未だ夜のうちなれば、定かにも見わからず。昔天智天皇の御代、大和國飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都うつりありて、大津の宮を造られけりと聞くにも、この程は古き皇居の跡ぞかしと覺えて哀なり。

さゝ波や大津の宮のあれしより

名のみ残れる志賀のふる里

曙の空になりて、勢多の長橋うちわたす程に、湖遙かに現れて、か

(一)第三十四代天  
明天皇の二年  
から六年間と  
第三十六年齊  
明天皇の二天  
から六年間天  
か天皇の六年  
でとの皇居ま  
智天皇の六年  
智天皇の六年  
で天皇の元弘  
天皇の皇居ま

老上村  
老上村  
老上村  
老上村  
老上村  
老上村  
老上村  
老上村  
老上村  
老上村

(一)滋賀縣栗太郡  
老上村

(二)同縣野洲郡

(三)昆明、春、昆明

春、春池岸古  
春、春池岸古  
春、春池岸古  
春、春池岸古  
春、春池岸古  
春、春池岸古  
春、春池岸古  
春、春池岸古  
春、春池岸古  
春、春池岸古

の滿誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝ、詠めりけん歌思ひ出でられて、漕ぎゆく舟のあとの白波誠にはかなく心細し。

世の中を漕ぎゆく舟によそへつゝ

ながめし跡をまたぞながむる

この程をも行過ぎて、野路といふ所に至りぬ。草の原露繁くして、旅衣いつしか袖のしづく所せし。

篠原といふ所を見れば、西、東へ遙かに長き堤あり。北には里人す

みかを占め、南には池の面遠く見えわたる。向ひの汀、緑深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影を浸さねども、青くして滉漭たり。洲崎とこころに入りちがひて、葦、かつみなど生ひわたれる中に、鴛鴦、鴨のうち群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。都を立つ旅人、この宿にこそ泊りけるが、今はうち過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變り行く世の

習飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりと覺ゆれ。  
行く人もとまらぬ里となりしより  
あれのみまさる野路のしの原。

(一)同縣蒲生郡武佐村にある。今長光寺といふ。

(二)遺愛寺鐘鼓の枕聽。香爐峰雪撥簾看し(白氏文集)  
(三)支那江西省九江北縣香爐峰の

行暮れぬれば武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風夜ふくるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心地す。枕に近き鐘の聲、曉の空におとづれて、かの遺愛寺のほとりの草の庵の寢覺も、かくやありけん、と哀なり。行末遠き旅の空思ひ續けられて、いといたうもの悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だに

かたしきわびぬとこの秋かぜ。

音に聞きし醒が井を見れば、かげ暗き木の下、の岩根より流れ出づる清水、あまり涼しきまで澄みわたりて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く涼みあへり。かの西

行が

みちのべに清水ながるゝやなぎかげ

しばしとてこそ立ちどまりつれ。

と詠めるも、かやうの所にや。

みちのべの木かげの清水むすぶとて

しばしすまぬたびびとぞなき。

(一)滋賀縣坂田郡。

(二)藤原良經。特に和歌に長じて、あたる建永元年(一一八三)八月、歿年三十八。

(三)一人すまぬ不破の關屋の板。後には、秋の風、新古今集。

柏原といふ所を立ちて、美濃國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底におとづれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、哀に心細し。越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板びさし年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の荒れにし、後はたゞ秋の風、と詠ませ給へる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、鄙しき言の葉をのこさんもなか、に覺えて、こゝをば空しくうち過ぎぬ。

(一)岐阜縣(美濃國)安八、不破二郡の境を流れる。  
「水の面に照る月なみをかぞふれば、こよひぞ秋の最中なりける。」  
(拾遺集 源順)  
(三)三五夜中新月色。二千里外故人心。白氏文集

株瀨川といふ所に泊りて、夜ふくる程に、川端に立出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀨にうつろひて、照る月波も數見ゆるばかり澄みわたれり。二千里の外の故人の心遠く思ひやられて、旅の思いと、抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、花落を出でて三日、株瀨川に宿して一宵、しばし幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつ遠情を先途一千里の雲に送る。など、或家の障子にかきつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しも

かゝるたび寝の月を見んとは。

—東關紀行—

四 かぐや姫の昇天その一

三年ばかりありて、春の初より、かぐや姫月のおもしろう出でた

せちに

るを見て、常よりももの思ひたるさまなり、或人の月の顔見るは忌む事と制しけれども、ともすれば人間には月を見て、いみじく泣き給ふ。七月の望の月に出でゐて、せちにももの思へる氣色なり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、かぐや姫例も月を哀がり給ひけれども、この頃となりては、たゞ事にもはべらざんめり。いみじく思し、歎く事あるべし。よく見奉らせ給へ。といふを聞きて、かぐや姫にいふやうな、なでふ心地すれば、かくものを思ひたるさまにて月を見給ふぞ。うましき世に。といふ。かぐや姫月を見れば世の中心細く哀にはべり。なでふものをか歎きはべるべき。といふ。かぐや姫のある所に至りて見れば、なほもの思へる氣色なり。これを見て、あが佛何事を思ひ給ふぞ。思すらん事何事ぞ。といへば、思ふ事もなし。ものなん心細く覺ゆる。といへば、翁月な見給ひそ。これを見給へば、もの思す氣色はあるぞ。といへば、いかでか月を見ずにはあらん。

うましき世  
見まじき世  
うましき世

とて、なほ月出づれば出でゐつ、歎き思へり。夕闇にはもの思はぬ  
氣色なり。月の程になりぬれば、なほ時々はうち歎き、泣きなどす。こ  
れを使ふものども、なほもの思す事あるべし」とさ、やけど、親を始  
めて何事とも知らず

八月十五日ちのばかりの月に出でゐて、かぐや姫ひめといたく泣き給  
ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て親どもも、何事ぞ  
と問ひさわぐ。かぐや姫泣くく、いふ、さきくも申さんと思ひし  
かども、必ず心惑はし給はんものぞと思ひて、今まですぐしはべり  
つるなり。さのみやはとて、うち出ではべりぬるぞ。おのが身はこの  
國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契ありけるにより  
てなん、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになり、けれ  
ば、この月の十五日に、かのもとの國より迎に人々まうで來んぞ。さ  
らず罷りぬべければ、思し歎かんが悲しき事を、この春より思ひ歎

さのみやは

きはべるなり。」といひて、いみじく泣く。翁おきなこは、なでふ事を宣ふぞ。竹  
の中より見つけきこえたりしかど、菜種なづなの大きさおはせしを、我が



竹取翁たけとけおきなととかぐや姫かぐやひめ  
(筆すゐ四郎しろう)

ども、かくこの國には數多の年を経ぬるになんありける。かの國の  
父母の事も覺えず、こゝにはかく久しく遊びきこえてならひ奉れ  
り。いみじからん心地もせず、悲しくのみなんある。されどおのが心

ならず罷りなんとする。といひて、もろともにいみじう泣く。使はるる人々も年比ならひて、立別れなん事を心ばへなどあてやかに美しかりつる事を見ならひて、こひしからん事の堪難く、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。

この事を帝聞し召して、竹取が家に御使遣させ給ふ。かの十五日、司々に仰せて、敕使には少將高野大國といふ人をさして、六衛のつかさ合せて二千人の人を、竹取が家に遣す。家に罷りて、築地の上に千人屋の上に千人の家の人々と多かりけるに合せて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓箭を帶して居り、母屋の内には女どもを番にするて守らす。嫗塗籠の内にかぐや姫を抱きて居り、翁も塗籠の戸をさして戸口に居り、翁のいはく、かばかり守るところに、天の人にもまけんや。といひて、屋の上をる人々にいはく、つゆも物空にかけらば、ふと射殺し給へ。守る人々のいはく、かばかりして

塗籠

初めは、  
王藏、  
と一又、  
と一又、

したくみ

守るところに、蝙蝠一つだにあらば、先づ射殺して外にさらさんと思ひはべり。といふ翁、これを聞きて、たのもしがり居り。これを聞きてかぐや姫は、さし籠めてまもり戦ふべきしたくみをしたりとも、あの國の人をえ戦はぬなり。弓箭して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば、皆あきなんとす。相戦はんとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ。翁のいふやう、御迎に來ん人をば、長き爪して眼をつかみつぶさん。さが髪をとりてかなぐり落さん。さが尻をかき出でて、こゝらのおほやけ人に見せて恥見せん。と腹立ち居り。

さが髪

五 かぐや姫の昇天その二

かゝる程に、宵うち過ぎて子の時ばかりに、家のあたり晝のあかさにも過ぎて光りたり。望月のあかさを十あはせたるばかりにて、

わりのかみさ  
かぐや姫  
みやのやん  
とんちんちん



るかぐや姫外に出でぬ。えとむまじければ、たゞさし仰ぎて泣き居り。

竹取心惑ひて泣伏せる所に寄りて、かぐや姫いふ、「こゝにも心にもあらでかく罷るに、昇らんをだに見送り給へ」といへども、何しに悲しきに見送り奉らん。我をばいかにせよとて、棄てては昇り給ふぞ。具してゐておはせね」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。文を書置き罷らん。こひしからんをり、取出でて見給へ」とて、うち泣きて書くことばは、

見おこす

この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まではべるべきを、はべらで過ぎわかれぬる事返す、本意なくこそ覚えはべれ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらん夜は見おこせ給へ。見すて奉りて罷る、空よりも落ちぬべき心地す。と書置く。天人の中に持たせたる宮あり。天の羽衣入れり。またある

は不死の薬入れり。ひとりの天人いふ、壺なる御薬奉れ。穢き所のもの食し召したれば、御心地悪しからんものぞ」とて、持てよりたれば、聊か嘗め給ひて、少しかたみとて、ぬぎおく衣に包まんとすれば、ある天人包ませず、御衣を取出でて著せんとす。その時にかぐや姫しばし待て」といひて、衣著つる人は心ことになるなり。もの一言いひおくべき事あり」といひて、文書く。天人おそしと心許ながり給ふ。かぐや姫もの知らぬ事な宣ひそ」とて、いみじく靜かに、おほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。

かく數多の人を賜ひてとゞめさせ給へど、許さぬ迎まうで來てとりゐて罷りぬれば、口惜しく悲しき事。宮仕つかうまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にてはべれば、心得ず思し召しつらめども、心づよく承らずなりにし事なめげなるものに思し召し止められぬるなん、心にとまりはべりぬる。

侍らるる人...  
いんぞく...  
覚束ふ...  
きかふけ...  
乳山...  
なめげ...  
無禮...  
ナト...



とて、

いまはとて天のはごろもきるをりぞ  
いまはとて天のはごろもきるをりぞ  
君をおはれとおもひいでぬる。

とて、壺の薬そへて頭中將を呼寄せて奉らす。中將に天人取りて傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣うち著せ奉りつれば翁をいとほし悲しと思しつる事も失せぬ。この衣著つる人は、もの思もなくなりなければ、車に乗りて百人ばかり天人具して昇りぬ。

竹取物語

六 初雁を聞く辭

加藤 千 蔭

桐の葉の一葉散りをむるゆふべ、ひとり高き屋にのぼりて、七つをの、を琴をかきならしつ、秋の風の言葉をうそぶき出せるをりしも、遠つ人初雁がねの聲かすかにきこゆるにおどろきて、しばし

(一)江戸時代の國學者、歌人、本姓は橋。芳宜、文化五年(二四六八年)歿、年七十四。

はねならはしつ、

片なり

鶯の籠に

ひびく梅の花

をりてかざさ

ん老かくるや

今集、東三條の左の

おほいまうち

君、

立ちく

(二)「あらたまの

年たちかへる

あしたより、

待たるもの

は、拾遺集、素性

法師、それかあらぬ

をち返り鳴く

ひきさしつ、見さくれば姿は雲路になん消失せぬ。いでや白雪の舊年よりしも、はねならはしつ、かげろふの春立ちそむるあした、日影うら／＼とうち霞めるに、軒近き篋にねぐらしめつる鶯の、まだ片なりなるうひごゑにほひ出せるより、笠にぬふてふ花のかをり満てる枝に來あつ、ほこりにかにさへづるは、めでたきものがら、雲にたぐへし櫻も散りすぎて、青葉しげき木の間を立ちく、聲のむくつけきには待たる、ものはといひしに行きたがへてぞおぼゆるかし。池の藤なみ夏かけてにほへる頃、ほとゝぎすの、それかあらぬか、とたどらる、一聲より、花橘のゆくりなく、香にほへる曙あり、明の月のさやかなるみ空に、さだかに名のりて過行くは、更なり。小雨そぼふるゆふべ、物思にいを寝ずして、更けすぐる夜半に、をち返り鳴くを、誰やし人かあはれとおもはざらん。しかはあれど、山かたつけるわたりには、こちたきまで飛びかひつ、梢にしもお

行やんて  
山は常  
時あつた  
うれたし

おもひあがる

(一)「春霞たつを  
見捨ててゆく  
雁は、花なき  
里にすみやなき  
らへる。」(古  
今集、伊勢)

りゐて高やかに鳴きとよめるなどは、今一聲のといふべくもあら  
ずうれたたきや、そも雁は、常世の國をや出でけん、三越路よりや  
來ぬらんある時は眞木立てる荒山のあしたの霧にむせびある時  
はみるめ刈るやしほぢのゆふべの浪をつばさにかけて、草の枕た  
に結びあへず、天路はるかにおもひあがりて、夕暮の雲のはたてに、  
聲は、を舟漕ぐ唐艦にかよひ、姿は薄墨に、かける文字に似て、一つら  
過ぎゆきつゝ、遠方の田づらに落ちくるさまさへおほどかにして、  
その時しも萩の葉におとなふ風、萩が枝に亂るゝ露くまなき夜半  
の月、染めかくる木々のもみぢ、千たび八千たび打ちすさぶきぬた  
の音、おしこめてあはれなるをりに逢ひぬるが、限りなくめでたく  
なんまた別けていぬる春べには、花を見捨つるなどがむめれど、  
しづけかるみ山の花をつばさにしめんとて、都の空をいそぐなら  
んと思へば、そもはたにくからずこそ、雁よ、なれこそはわがお

秋思  
もふどちなりけれ  
われもいざ秋をあはれぶ友どちの  
つらにはもれじ天つかりがね  
—うけらが花—

七 芳宜園大人の靈を祭る

村田春海

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて、芳宜園の大人のお  
くつきの御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらをたきて、う  
なねつきて申さく、あはれ悲しきかも、君は吾に十といひて一とせ  
のこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はま  
さにさかりの齡におはして、吾はまだわらばにてぞはべりける。常  
に縣居の庭にも、の學びにゆきかひたる時、あしたに參るとしては、君  
のみはかしのしりへに従ひ、ゆふべにまかるとしては、君の御袖のも

七 芳宜園大人の靈を祭る

元

(一)江戸時代の國  
學者・賀茂眞  
淵に學び、和  
歌文・加藤千  
蔭と共、稱せ  
られた。文化  
八年(二四七  
一年)歿。年  
十六。  
うなねつきて  
このかみ

おととえ

世のさが

閑居燈  
世の事はそ  
むきはてた  
る窓のうち  
になとよも  
し火の花を  
みすらん  
春海

ありふる

みせり  
ありふる  
ありふる

とにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か  
異ならん。書讀むとては君を師ともたふとみ、歌作るとては吾をお  
ととえのつらにぞ教へ給ひける。  
中ごろにして君は仕の道に暇なくおはし、吾は世のさがにか  
づらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君任をしぞき給ひて

不名院

その年あつたに  
大いなる  
まほ

蹟筆海春田村

後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては吾道しるべをなし  
月を思ふとては君が舟に相乗り、憂き事もともに憂へ、嬉しき節も  
ともに喜びて、世にありふる業の、まめごとともあだごととも、かたみに  
隔なく心をかはせること、今にはたとせ、その初を繰返し數ふれば、  
あひ友たることすでに五十とせにぞ餘りける。さるを今おくれ奉

(一)「宋人有耕  
田者。田中有  
株。兔走觸株、  
折頸而死。因  
釋其耒而守  
株。冀復得兔。  
兔不可復得、  
而身爲宋國  
笑。」(韓非  
子)

(二)「楚有涉江  
者。其劍自舟  
中墜于水。  
遽刻其舟、  
曰：『是吾劍所  
從墜也。』舟止、  
從其所刻者、  
入水求之。  
舟已行矣。而  
劍不行。求劍  
若此、不亦惑  
乎？」(呂氏春秋)

りて、いつの世にか相見ん、いづれの時にかこととはん。常なきは人  
の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらんか、るを誰かは  
よく堪へん。  
あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下り行  
けるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古に復り、青雲の高き心し  
らびを求め、賤機のあやあるみやびごとを尊みいへれど、くひぜを  
守り、舟にきだつくるともがら、かれに泥み、こゝにひかれて、なほ怪  
しみとがむるたぐひは多く、たまあひてよくうけひく人なん稀な  
りしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人はま  
のあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、いにしへぶりの歌  
世に盛になりたるなり。  
そのみづから詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とり  
どりに備らざるはなし。その古を寫せるは藤原寧樂の御世に及び

面おこし  
價なき寶

後の巧に倣へるは堀河鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは口に  
盡さざることもなく、目に觸るゝものは言の葉にのせざることもな  
あらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる  
人なし。また事好みの人は、その名を君に知られては、身の面おこし  
と思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじと  
いひてぞ深く喜びける。  
然るを今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わ  
がどちの歎のみかは、おほかたの世の憂ともいひつべし。これをい  
かでか惜しまざらんか、るを誰かは慕はざらん。あはれ悲しきか  
も、わがかく言あげするを、泉の下にもさやかにきこしめし、天翔り  
ても遙かに見そなはせとなん申す。

— 琴後集 —

八 夜なが

夕月や納屋も寝も棟の影も鳴雪  
(一)俳人 内藤素行 松山市の  
人 大正十五年  
(二)俳人 伊藤半次郎 長野縣  
人 安政六年  
(三)俳人 喜谷良哉 東京市  
人 明治十年  
(四)俳人 童話作家 巖谷季雄  
東京市の人  
(五)俳人 河東兼五郎 松山市  
人 明治六年  
(六)俳人 松瀬彌三郎 大阪市  
人 明治二年  
門川に流れ  
藻絶えぬ五  
月哉 碧



蹟筆雪鳴

元日や一系の天子富士のやま。  
谷ふかくたがために草のかんばしき。  
桃散るやもやしの三葉風わたる。  
行く春やぼう／＼としてよもぎ原。  
大和路やひばりおちこむ塔のかげ。  
さみだれやからす草ふむ水のなか。  
白き蝶野路に吹かるゝ薄暑かな。

(一) 鳴雪 (二) 松宇 (三) 松花 (四) 子規 (五) 小波 (六) 碧梧 (七) 青々



蹟筆桐梧碧

八 夜なが

四



(一) 宗教家、宗教學者、登山家、東京市の人。明治七年生。

(二) 第四十五代。元明、元正、聖武の三朝に歴事した。文學を好み詩を平くした。天平十一年(一三九九年)歿。  
(三) 萬葉集卷五。

言靈

うしはく

九 言靈の幸はふ國 別所梅之助<sup>(一)</sup>

島の國日本は、何時も外國の文化を學ぶのに忙しかつた。あをによし奈良の御代にも、遣唐使が屢かの國へと向つた。さういふ人々は、浪風に弄ばれて、思はぬ地に漂ひ著いたり、渡津海の底に沈んだりした<sup>(二)</sup>。聖武天皇の天平五年、多治比の廣成が大使としてその危きを冒す事になつた時、嘗て自分も遠く海を渡つた經驗のある山上憶良が、これに好去好來の歌を贈つた。

神代よりいひつてけらく、そら見つ倭の國は、  
すめ神のいつくしき國、言靈のさきはふ國と、  
語りつぎいひつがひけり、  
と筆を起し、  
海原のへにも沖にも、神づまりうしはきいます、

もろ／＼の大御神たち、船のへに導きまをし、  
と行く手を祝ひ、さて 船のへに導きまをし、

ことをへて歸らん日には、また更に大御神たち、  
船の舳に御手うちかけて、墨繩をはへたる如く、

値賀の島から難波津まで、まつすぐに著く様つゝ、がなくお歸りなされとことほいだ。廣成の船は翌年の冬歸路に就いたが、歌の様に歸れなかつた。一行四艘の船がちり／＼になつて、廣成や吉備眞備の乗つてゐただけが、種ヶ島に流れ著いた。それでも一行中の他の船の、唐へ吹きかへされたり、崑崙國今の安南邊でなくても、とにかく南の地まで漂はされて、囚人にされたりして、足かけ七年めに歸れたのよりは、遙かに幸運であつたらう。

當時の人々に取つて天のなせる災害、人智の如何ともし難しとする變に遭易い征途を、古人は言葉もて祝した。我等がよき言をつ

(一) 長崎縣の五島列島の別稱。

(二) 本姓は下道朝臣。寶龜六年(一四三五年)歿、年八十三。  
(三) 鹿兒島縣(大隅國)熊毛郡佐多岬の東南

(一) 舊約聖書。キリスト以前に完成したユダヤ民族の經典。全三十九卷。

(二) 八十六卷。谷川士清の著。我が國の古語、俗語、方言等、五十音順に排列して解釋したもの。

らねて幸あれと祈れば、しかなるといふのである。  
「神、光あれと言ひ給ひければ、光ありき。」<sup>(一)</sup>創世記の第一章のつたへでは、水と空との分れたのも、草木の生じたのも、日月のあらはれたのも、生き物の出たのも、皆神の御言のまゝに、しかなつたのだといふ。さういふ信念が、恐らく方々にあつたのであらう。

萬葉集の十三の卷にも

しき島の倭の國はことだまの

助くる國ぞまさきくありこそ。

といふ歌がある。これも或は、前の憶良のと似通うたをりの詠かも知れぬ。作者は、瑞穂の國は神ながら言あげせぬ國」と知つてゐても、尙言あげして、友の無事ならん事を祈る。言葉にひそむ靈よ、我が祈を容れて、我が言葉を實にせよと希ふ。

旅行く人を送るとて、古人は「うまのはなむけ」をした<sup>(二)</sup>倭訓栞には

(Good morning.  
(Good day.  
(Good night.

歸依する

「門出を祝ひて途中つゝ、がなからん爲に、道祖神に手向するなり。」と解いてある。多分出發に際して、「さきくませ。」とか「はや歸りませ。」とか言ほいだのであらう。その「さきくませ。」も「はや歸りませ。」も心からの言で、しかあらしめんとする強い祈願であつたらう。<sup>(一)</sup>グッドモーニング<sup>(二)</sup>「グッドデー、<sup>(三)</sup>グッドナイト」何れも唯の言葉ではない。さうあれかしと希ふのである。希ふが如くなる。と期待するのである。南無阿彌陀佛と稱へるのに、御名の貴きにすぎる念がなからうか。南無妙法蓮華經の唱題も、法華經が尊い故にそれに歸依するとしても、それを唱へるのは、經その物語その物に威力ありとするのでなからうか。我等は雨の降らないのに苦しみ、また長雨にも窮する。鎌倉時代の民は、雨を祈るには黒毛の馬を、晴を祈るには白毛の馬を社に奉つたといふ。黒いのは黒雲に寄せた思であり、白いのは白雲に寄せた思であつた。

(一) 藤原基長の歌。  
倭訓栞にある。

(二) 奈良縣吉野郡  
丹生村にある  
祈雨の大神  
新室ほかひ

(三) 第二十三代。

(四) 日本書紀清寧  
天皇の條にあ  
る。

(五) 催馬樂の歌。

(一) 神垣にひく駒の毛の色みせて

あまぐもきほへ丹生の川上。

といふ歌もある。丹生は雨の神を祀つた社である。

新築が落成する。すると昔は新室ほがひといふ事をした、弘計の

王——後の顯宗天皇は播磨なる縮見の屯倉の首の家で、

……取りゆへる繩葛は、この家長のみのちの堅めなり。

採りふける草葉は、この家長のみ富のあまりなり。……

とお歌ひなされたといふ。中古には

(五) この殿はうべも富みけりさきくさの

三つば四つばに殿づくりせり。

と祝ひ、後の賀茂眞淵は

飛驒たくみほめてつくれるまき柱

たてし心はうごかざらまし。

と自ら誓つた。これ等もしかあらん事を望んで、言にあらはしたの  
である。大殿祭の詞の中に、

「天つくすしいはひごとをもちて、言ほぎしづめまをさく云々。」

といふ句がある。これは言葉の靈妙をたへて、その力によるとい

ふのである。天つくすしいはひごととは、私どもに「言語は神の人に

授け給ひしものなり」といふ説を想はせる。思へば言葉はいみじく、

くすしい、これは神業でがなあらうとは、素朴な古人のいづくでも

感じてゐた事であつた。——心のふるさと——

一〇 萬葉時代の歌人

(一) 新保磐次

柿本人麻呂は萬葉集中屈指の歌人なり。持統の朝に草壁皇子の  
舍人となり、皇子薨去の後、朝廷の小官に任ぜられ、その後高市皇子  
に仕へしが、皇子また薨じ給ふ文武の朝に石見の國に赴任して、元

(一) 歴史家。新潟  
縣の人。  
(二) 第四十一代。  
(三) 第四十代天武  
天皇の第一皇  
子。  
(四) 天武天皇の皇  
子。  
(五) 第四十二代。  
(六) 第四十三代。



明の和銅年中かの國にて卒しぬといひ、或はこの朝の神龜または天平年中に卒しぬともいふ。その間、紀伊、伊勢、吉野等の遊幸に供奉し、或は諸皇子に従ひて名勝を探り、或は近江、石見、筑紫の諸國に遊



(筆音頼堀小)呂麻人本柿

びて、過ぐる所歌あらざるはなし。就中最も人口に膾炙せるものは百人一首に載する

所なる事言ふまでもなし。

近江の舊都を傷む歌

さ、波の志賀の辛崎さきくあれど  
おほみやびとの船まちかねつ。

(一)滋賀縣滋賀郡唐崎の一つ松とて近江八景の一

(一)島根縣(石見國)那智郡都濃村

また石見より妻に別れて上る時の歌

石見のや高角山の木の間ゆも

わが振る袖をいも見つらんか。

死に臨みて自ら傷みて作れる歌

鴨山の岩根しまけるわれをかも

しらずと妻が待ちつゝあらん。

皆哀情痛切にして、鬼神を泣かしむべし。

人麻呂特に長歌に長じ、古今獨歩と稱せらる。然れども官位は甚だ卑くして、位は六位以下、官は石見の掾若しくは目に過ぎざるべしといふ。古今集の序に「正三位人麻呂」とあるは、後世の贈位にやあらん。柿本集に「唐土にありて」と題せる歌あれど、彼が入唐またその詳かなるを知り難し。要するに、人麻呂は微賤の身を以て、詞藻を雲上に達したるものにして、後世壬生忠岑が長歌の中に、

ふやの妻は  
みよまやに  
さやゆい  
わがゆい  
わがゆい  
わがゆい

古今獨歩

(二)同縣美濃郡高津浦の沖。今鴨島といふ。

詞藻  
(三)歌人。古今集撰者の一人。康保二年(九六五年)歿。年九十八。

あはれ古ありきてふ 人麻呂こそはうれしけれ。  
身は下ながら言の葉を、天つ空まできこえ上げ。  
といへるこそ眞實なるべけれ。

山邊赤人の傳も詳かに知り難し。神龜、天平の間彼もまた屢、車駕に供奉して、紀伊、吉野等に至り、或は自ら東國に遊ぶ。その富士の歌は百人一首によりて兒女子にも知らる。彼が富士の歌數首あり。

富士の嶺を高みかしこみ天雲も  
いゆきはぶかりたなびくものを。

和歌の浦の歌また世に知らる。

和歌の浦に潮みちくれば瀉をなみ  
あし邊をさしてたづ鳴きわたる。

神に入る

前首は雲を人格化してその畏敬の狀を詠じ、後首は滿潮の時の鶴の恐慌を敘す。共に巧を假らずしてその詠神に入れり。人麻呂は

長歌に長じ、赤人は短歌に長ず。人麻呂はよく情を抒べ、赤人はよく景を敘す。紀貫之は二人を評して、人麻呂は赤人が上に立たん事難く、赤人は人麻呂が下に立たん事難くなんありける。と言へり。賀茂眞淵が人麻呂を評したる大意に、その長歌の勢は、風雲に乗じて長空を行く龍の如く、詞は大海に潮の湧くが如し。短歌の詞は勇將の弓弦を鳴すが如く、深き哀情はちはやぶる神をも泣かしむべし。と言へり。また赤人を評していはく、長歌の詞は吉野川の清きが如く、心は富士の嶺の高きが如く、唯それ美を盡せり。短歌の巧を爲さずして自然に妙なるは、本心の高尚なるが致す所か。譬へば、檳榔毛の車にて大路を渡る貴人の、聲色を動かさざるが如し。と言へり。世に二人を並べ稱して山柿といふ。

山柿に亞げる詩人を山上憶良とす。憶良は大寶年中遣唐少録として入唐せし人なれば、その漢學に秀でし事知るべし。歌は山柿に

(一)文武天皇の御代。(一三三六—一三六三年)

遊覽の作多きに反し、これは多く題を人事に取り、君臣、父子、夫婦の情を詠じ、社會、人生の有様を歌へり。嘗て宴席より歸る時、

憶良らは今はまからん子泣くらん

そのかの母もあを待つらんぞ。

天平二年彼が筑前守たりし時にや、貧窮問答の歌を作りて、地方貧民の苦を訴へたり。その中に

天地は廣しといへど、 わがためは狭くやなりぬる。

日月は明しといへど、 わがためは照りやたまはぬ。

いとゆづりのきて短き物を、 端切るといへるが如く、

しもと取る里長が聲は、 閨戸まで來立ち呼ばひぬ。

かくばかりすべなきものか世の中の道。

以て官吏誅求の状を述べたり。嘗て病に臥したる時、

をのこやも空しかるべき萬代に

(一)一三九〇年。

誅求

苦歎詠す  
程ふいそりしと

か  
あ

儒夫

(一)昔久米氏の率ゑる部族。常に警衛軍旅にあづかつた。

あまのまの  
わらう

(二)美努王の子。左大臣正一位に進んだ。天平四年(四一七年)歿。年七十四。

(三)大納言旅人の子。聖武孝謙兩天皇に仕へた歌人。(一四四五年)歿。年四十四。

語り繼ぐべき名は立たずして。

感慨淋漓として、儒夫を起たしむるに足れり。眞淵彼が歌を評して、「言質朴にして心美し、久米部の武士の武裝して舞ふが如し。」と言へり。

この人々を初めとして、主に奈良朝の歌を集めたるは萬葉集なり。仁徳天皇以後の歌を含むと雖も、上代の作は甚だ少し。撰者は橘諸兄もろえにして、大伴家持が修補せしものなりと言ひ、異説尙多けれど、家持の手に成りしが如し。家持は百人一首の中納言家持にして、陸奥より黄金を進獻せる時、

すめらぎの御代榮えんと東なる

みちのく山にこがね花さく。

と詠ぜし人なり。萬葉集中一二流の歌人にして、最も多く武士的歌を詠ぜり。總じて萬葉の長所は長歌に在り、後世これに及ぶなし。

— 趣味の日本史 —

一一 萬葉集の歌

(一) 天武天皇  
(二) 鎌足

天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶  
秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌

冬ごもり 春さりくれば、なかがりし鳥も來鳴きぬ、  
さかざりし花も咲けれど、山をしみ入りても聴かず。  
草深みとりても見ず。秋山の木の葉を見ては、  
もみぢをば取りてぞしぬぶ。青きをば置きてぞ歎く。  
そこし恨めし秋山われは。

安見し、わが大君 神ながら神さびせすと、吉野川瀧つ

柿本人麻呂

河内に、高殿を高知りまして、上り立ち國見をすれば、

國見

長き物まじの縮まりらるる  
かきあはる

た、なはる青垣山の、山神のまつる御調と、春べは花か  
ざし持ち、秋立てば紅葉かざせり。夕川の神も、大御食  
に仕へまつると、上つ瀨に鵜川を立て、下つ瀨に小網さ  
しわたし、山川もよりて仕ふる神の御代かも。

反歌

山川もよりてつかふる神ながら  
たぎつ河内に船出せすかも

望不盡山歌

山部 赤人

天地のわかれし時ゆ、神さびて高く貴き、駿河なる富士  
の高嶺を、天の原ふりさけ見れば、わたる日の影もかく  
るひ、照る月の光も見えず、白雲もい行きはゞかり、  
時じくぞ雪はふりける。語りつぎいひつぎ行かん、  
富士の高嶺は。



AKASHI

(一)佐保大納言安麿の女。旅人月不詳。生歿年

(二)傳不詳。

(三)平安時代の文人。第五十九代宇多天皇の子。齊世の九親王の孫。九九年(一)歿。五(四)平安時代の文人。長徳三年(六五七年)歿。

あきのぬのみ草かりふき宿れりし  
うぢの都のかりいほし思ほゆ  
こもりくのはつせの山は色づきぬ  
じぐれの雨はふりにけらしも  
志賀の海人はめかりしほやき暇なみ  
くしげの小ぐしとりも見なくに

大伴坂上郎女

石川郎女

長生殿(朗詠)

祝

嘉辰令月歡無極  
長生殿裏春秋富

萬歲千秋樂未央  
不老門前日月遲

源英明  
慶滋保胤

君が代は千代にやちよにさざれ石の

春興

よみ人知らず

野草芳菲紅錦地  
遊絲繚亂碧羅天

劉禹錫

も、しきの大宮人は暇あれや

櫻かざしてけふもくらしつ

山部赤人

春夜

背燭共憐深夜月  
踏花同惜少年春

白居易

はるの夜の闇はあやなし梅の花

色こそ見えね香やはかくる

凡河内躬恒

杜鵑

一聲山鳥曙雲外  
萬點水螢秋草中

許渾

さつきやみおぼつかなきを杜鵑

(一)唐の詩人。字は夢得。

(二)平安時代の歌人。古今集撰者の一人。生歿年月不詳。

(三)唐の詩人。字は仲晦。

(一)第五十代桓武天皇の皇子(一)承和元年(一四九四年)薨。  
(二)平安時代の歌人。天曆二年(六〇八年)歿。年六十。

(三)平安時代の宮女。宇多天皇の第四皇子式部卿敦慶親王の女。

(四)平安時代の文人。菅原道真の門人。延喜十六年(一〇一五年)歿。年五十八。

なくなる聲のいとゞ遙けき。  
ゆきやらで山路くらしつ杜鵑  
いま一聲のきかまほしさに。  
明日香皇子(一)  
源公忠(二)

納涼  
池冷水無二伏夏。松高風有<sub>二</sub>一聲秋。  
源英明

したくゞる水に秋こそ通ふらし  
むすぶ泉の手さへすゞしき。  
中務(三)  
八月十五夜

三五夜中新月色。二千里外故人心。  
白居易  
十二廻中無勝於此夕之好。  
紀長谷雄(四)  
千萬里外皆爭於吾家之光。

水の面にてる月なみをかぞふれば  
こよひぞ秋のもなかなりける。  
源順

秋興

林間煖酒燒紅葉。石上題詩拂綠苔。  
白居易

秋はなほ夕まぐれこそたゞならね  
をぎのうは風はぎのした露。  
藤原義孝(一)

歲暮  
寒流帶月澄如鏡。夕吹和霜利似刀。  
白居易

ゆく年のをしくもあるかなます鏡  
見るかげさへにくれぬと思へば。  
紀貫之

一三 羽衣

ワキ一聲風早の三穂の浦曲をこぐ船の浦人さわぐ浪路かな。  
ワキサシ「これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。ワキ「萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨初めて晴れたりげに長閑な

ツシテ  
ツレ  
漁夫  
天人  
白龍  
三保とも書く。  
(二)「風早の三穂の浦曲をこぐ船の浦人さわぐ波たつらふしも、萬葉集よみ人知らず」  
(三)「千里好山雲乍斂。一樓明月雨初晴。」詩人玉屑の句。

(一)平安時代の歌人。天延二年(一三三四年)歿。年二十六。

(一)「忘れずよ清見が關の波間より霞みて見えし三保の浦松中務卿今集」  
 (二)「風むかふ雲のうき波たつと見えて釣せぬさきに歸る舟人」  
 藤原爲相

る時しもや、春のけしき松原の浪たち續く朝霞、月ものこりの天の原、およびなき身の眺にも、心空なる景色かな。歌、忘れめや、山路をわけて清見瀉、遙かに三保の松原にたちつれいざや通はん。風むかふ、雲のうき浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。ワキ詞、われ三保の松原にあがり、浦の景色を眺むる所に、虚空に花ふり、音楽聞え、靈香四方に薫ず。これたゞ事と思はぬ所に、これなる松に美しき衣懸れり。よりて見れば色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞、なう、その衣は此方にて候。何しに召され候ぞ。ワキ詞、これは拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候よ。シテ、それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。元の如くに置き給へ。

とやあらんか  
くやあらん

(一)「は頭上天花忽萎二は天衣座垢」  
 三「は腋下汗出」  
 四「は兩目數居」  
 五「は不樂本居」  
 (二)「天の原ふりさけ見れば霞立ち、行方知らずも、土記」

ワキ、そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留め置き、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ、悲しやな、羽衣なくては飛行の途も絶え、天上に還らん事もかなふまじ。さりとは返したび給へ。ワキ、この御詞を聞くよりも、愈、白龍力を得もとよりこの身は心なき、天の羽衣取隠し、かなふまじとて立ちのけば、シテ、今はさながら天人も、羽根なき鳥の如くにて、揚らんとすれば衣なし。ワキ、地にまた住めば下界なり。シテ、とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ、白龍衣を返さねば、シテ、力及ばず、ワキ、せん方も、地、涙の露の玉かづら、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ、天の原ふりさけ見れば霞立つ、雲路惑ひて行方知らずも。歌、地住馴れし、空にいつしか行く雲の、羨ましき景色かな。迦陵頻伽のなれなれし、聲今更にわづかなる、雁が音の歸り行く、天路を聞けば懷



かしや。千鳥、かもめの沖つ浪行くか歸るか春風の空に吹くまで懐かしや。

ワキ詞「いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御いたはしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あら嬉しや、此方へ賜はり候へ。ワキ「暫く承り及びたる天人の舞樂、只今こゝにて奏し給はば、衣を返



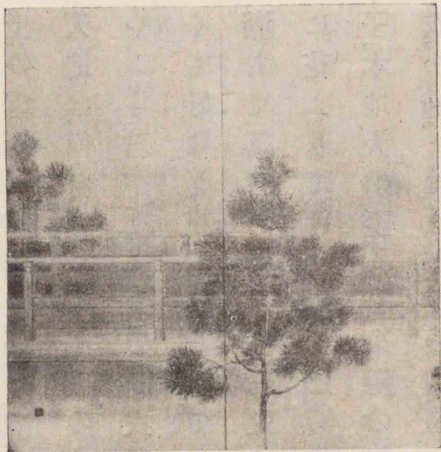
(筆漁耕卷坂)能の衣羽

し申すべし。シテ「嬉しや、さては天上に還らん事を得たり。このよろこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。只今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとは先づ返し給へ。ワキ「いや、この衣を返しなば、舞曲を

疑は人間にあり

霓裳羽衣の曲

玉斧の修理



(筆漁耕卷坂)能の衣羽

なさでそのまゝに、天にやあがり給ふべき。シテ「いや、疑は人間にあり、天に偽なきものを。ワキ「あら恥づかしや、さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ「少女は衣を著しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨にうるほふ花の袖、ワキ「一曲を奏で、シテ「舞ふとかや。地「東遊の

駿河舞、この時や始なるらん。

地「それひさかたの天といつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、ひさかたの空とは名附けたり。シテ「サシ「然るに月宮殿の有様、玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣、黒衣の天人の數を三五に分つて、一月夜々の天少女奉仕を定め

(一)「春霞たなびきにけりひさかたの月の桂も花や咲くらん」後撰集紀貫之  
 (二)「天つ風雲の通路吹きとちよめし」との良岑宗貞

(三)「君が代は天の羽衣まれにきて撫づとも盡きぬ巖なるらん」拾遺集よみ人知らず

(四)「笙歌遙聞孤雲上。聖衆來迎落日前。」大江定基

(五)「北は黄に南は青く東白、西くればあにそめいるの山。」(紫式部)

役をなす。シテ我も數ある天少女。地月の桂の身をわけて、かりに東の駿河舞世に傳へたる曲とかや。クセ<sup>(一)</sup>春霞たなびきにけりひさかたの月の桂の花や咲くげに花かづら色めくは、春のしるしかや。面白や天ならで、こゝも妙なり天つ風雲の通路吹きとちよ少女の姿しばしとゞまりて、この松原の春の色を三保がさき、月清見瀉富士の雪何れや春の曙たぐひ浪も松風も、長閑なる浦の有様。その上天地は何を隔てん玉垣の内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ<sup>(三)</sup>君が代は天の羽衣稀にきて、地撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌聲そへてかづくの笙<sup>(四)</sup>笛琴くご、孤雲の外に充ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山を寫して、緑は浪に浮島がはらふ嵐に花ふりて、げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。シテ<sup>(五)</sup>南無歸命月子、本地大勢至。地東遊の舞の曲、シテ、ワキあるひは天つみ空の緑の衣、地または春立つ霞の衣、シテ、色香も妙なり少女の裳裾、地左

右左、さいう颯々の花をかざしの天の羽袖なびくもかへすも舞の袖。舞東遊のかずくに、その名も月の宮人は、三五夜中の空にまた、満月眞如の影となり、御願圓滿國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲のあしたか山や、富士の高嶺かすかになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。—— 謠曲——

一四 藝術と人生

横山有策<sup>(一)</sup>

想像は藝術上の主要な一要素である。優れた藝術作品になればなる程この想像力が深く廣く、神祕の世界にまで及んでゐる。この想像力はいかにして出生するかといふに、これには物を正しく観察する観察力、それに對する批判が手段であつて、先づ自分といふ者を

(一)教育家、英文學者、岡山縣昭和三十八年歿、年四十四

経路又日記憶を材料  
 観念を補成する

見批評し、さうして後に人を見、自然を見る。即ち自己に依つて外の世界を見るのである。この場合、人とか、自然とか、すべて外の世界は自己の反映になる。即ち自己の想像の影になるのである。想像は常に自分といふ者が土臺になつてゐるのは勿論であるが、その想像の内容も自己である。つまり、最初に見た自分の影が想像の内容になつてゐるのである。であるからして、想像が深く廣く發達して行くといふ事は、これを客觀的に見れば、自己といふ者の姿を外の世界に押擴げて行く事である。これを主觀的に言へば、想像は發見なりとなる。今まで嘗て見た事のなかつた世界を知るのである。これを作品に表現する時、讀者は意外で、しかも眼の前にあつた世界を拾つた様な幸福を感じる。いふ如く、内と外との世界は決して矛盾はしてゐないのである。内の世界が充實してゐる人であればある程、外の世界を知り、理解が出来るのである。もの言はぬ草木を友と

discover

art and life

artist 宗達

するといふ様な詩人は、もの言はぬ草木をも友に出来るだけの心を自分が持つてゐるからである。また心ある人は、五錢で買つて來た皿の中に優れた美を見る事が出来ても、それ程でない人には、五錢の皿はやはり五錢の皿で、五錢だけの價值しかないのである。

二

日本を評價する物は、日本古來の藝術を外にしてはない。過去に於けるいはゆる大和魂の發露よりも、短歌とか、俳句とか、日本畫とかいふ様な藝術品の方が、日本の國民性を評價するには適當である。すべてその國民がどれだけの獨創的な藝術品を作つたかが、その國を評價する標準となるのである。豊臣秀吉の外征よりも、當時の桃山時代の繪畫である。日本は日清、日露の兩度の大戰によつて勇名を世界的にした。しかし、明治、大正に於ける藝術品の方が、より多く日本を語るものとなつてゐる。

class

藝術とは何であるか。美の追求である。美の表現である。然らば美とは何であるか。一例を擧げる爲に草木を取る。草木の枝も、樹も、葉も美しい。しかし、中で一番美しいのはその花である。即ち美とは人生に於ける最後の、乃至、最上の力の集合體である。さうしてこれを表現するのが藝術である。今我々の住んでゐる世界を二つに分けて見る。これは便宜上であつて、我々は二つにはつきり區劃された世界に住んでゐるのではない。が、假に外の世界と内の世界とする。この内の世界とはいかなる物か、即ち私自身だけの世界である。個人の世界である。友だちにも隣人にも、或は妻にも子供にも、望む事の出来ない、またさういふ他人に聞かせる事の出来ない世界である。即ち思索の世界である。批判の世界である。また唯我獨尊の世界である。一箇の人として、また一箇の國民としての權限の世界であり、同時に絶對の境地である。ナポレオンも、キリストもをかす事の

唯我獨尊

唯我獨尊  
 唯我獨尊  
 唯我獨尊

出来ない徹底自我の世界である。この世界の擁立を我々はしなくてはならない。この世界の擁立は人生の出發點の如き物である。さうして自己は、自己の内部にこの世界を把握すると同時に、他人にもこの世界のある事を許さなければならぬ。自分ばかりにこの獨尊の世界を許して、他人にそれを許さないと、畢竟手前勝手である。否、許すも許さないもない。勿論程度は違つてゐるが、人といふ人は、皆この世界、自分の世界を持つてゐる。三尺の兒童と雖も既に持つてゐる。何かした場合、親が子を叱る。その叱り方が餘りにひど過ぎると、その子は親を泣きながらもじろくと睨める。子供にも自己のある證據である。この境地が或程度まで向上した時、人は眞に自己であり、同時に生活者たるのである。この境地は、金でも、名譽でも、權力でも、自由に賣買する事は出来ない。金がなくても、どんなみじめな境遇にあつても、この境地さへしつかり握つてゐれば、そ

の人は救はれるのである。泰山の如き落著を持つてゐられるのである。然らばこの境地に於て、我々は何を爲すのであつたらうか。即ち自我の世界に於て人はいかなる生活をするか。それは眞の人間としての價值のある生活を營む事で、これを具體的に言へば、美の追求であり、美の表現であり、美の殿堂を自己の世界に建立する事である。

女子國文新選

自修文

藝術の表現

厨川白村

(一) 英文學者、評論家、文學博士。名は辰夫。京都市の人。大正十二年、年四十四で歿す。

世間の人は繪を見ても、また文章を見ても、あんな物は實際にありはしないといふ事をよく申します。昔から繪空事といふ言葉が出来てゐます。即ち繪はうそをかくものだといふ様に相場が極つてゐます。即ちあんな長い手はありはしない。あの花は瓣が六つのはずであるのに、あれは八つにかいてあるからうそだ。といふ様な事を申して、畫を批評する

科學萬能  
科學ほどえらいものはないといふこと



人があります。これは藝術の何たるかを了解しない、世間普通の素人に一番よくある事で、つまり、藝術といふものは、うそをかくものだと言ふのです。藝術家の中にも、さういふ事を思つてゐる人があるらしいが、科學萬能を信じてゐる人たちが、よくさういふ事を言ひます。或植物學者が展覽會の繪を見て、一々片端から、あの木の葉はあそこが間違つてゐる。こちらの花の葉はあれは本當でない。といふ様な事を言つて、批評して居つたのを見た事があります。これはまた御苦勞千萬な、餘計な詮議だてだと思ひます。

これに就いては、フランスのロダンの傳記の中にも、次の様な有名な話があります。或南米の金持が、ロダンに彫刻を依頼して、肖像を作つてもらつた。所がちつとも似てゐないと言つて、ロダ

Auguste Rodin.  
フランスの有名な彫刻家。有年。西紀一八七〇年。

ンにそれを返してしまつたといふ事です。ロダンは言ふまでもなく、世界に於ける近代の大藝術家である。その人の作つた品が、全くの素人の眼には、實物に似て居らぬからと言つて落第してしまつた。かういふ事は何を語つてゐるでせう。

若し唯外面的に或事象を寫すといふ事が藝術の本意であるなら安物の寫眞の引伸しを使つて置けばよいのです。藝術家の心血を注いだ風景畫よりは、地圖と寫眞とを置いた方がずつとよいわけです。人の顔を見てその恰好を似せてかくといふ事は、安つばい未熟な畫師にでも出来る事です。そんな事は堂々たる大藝術家の手腕を俟たないでも出来るのです。若し眞の藝術家に向つて、似せてかいて下さいと注文したならば、實物の形に似せるくらゐの繪なら、お易い御用だと言ふでせう。その代り、自己の本心や、自己の伎倆や、自己の藝術的良心に訴へて、そんな寫眞屋の下働みたやうな事はしないと云つて、お断りするに違ない

藝術的良心  
藝術家として  
持たねばなら  
ぬ良心

のです。

そこで、それなら藝術はやはりうそをかくのか、文章でも或は繪でも、あれは皆でたらめをかくのかといふお尋ねが出るかも知れませんが、藝術は飽くまで眞をかくに相違ない。繪の事は、私がちよつと簡単にいひ表すわけには行きませんが、文章の事に就いて申しますと、櫻花の爛漫たるを見て、あれは雲か霞かと言ふ様な事を申します。さうして實際雲の様な、或は遠山霞の様な物をかいて、萬朶の櫻の咲亂れてゐる所だと言つてゐます。確かにうそだ。所が、顯微鏡で櫻の花を調べたのよりも、花の雲の方が本當の感じ、本當の眞を現してゐて、一々櫻の瓣をかいたのよりも、私たちには雲か霞か、ばつと淡墨でも流して置いてくれる方が眞であると思はれます。譬へば、人相書でも、あの人の鼻はずつと上から降りて来て、前の方へ何<sup>一</sup>インチつき出てゐるといふ事を記述するよりは、あの人の鼻は尺八に似てゐると言つた方が、

Inch  
(吋)

藝術的表現を與へてゐる。その眞が生きて現れてゐます。古來支那人は非常に誇張が上手で、兵隊が一萬も居らうものなら、百萬の大軍と言つてしまふ。支那の軍記物などには、實にこれがうまく書いてあります。つまりうそです。法螺はうその一種ですが、白髪三千丈と言つて、人をばかにしてゐる。三千丈は愚か、實は三尺もありはしない。所が三千丈といふ事を聞くと、大袈裟ではあるが、いかにも長く垂れた白髪の様な氣分がします。

詭辯を弄する  
を非に曲げて理  
好んで奇怪な  
説をなすこと

うそであるかも知れないが、それが十分に或意味の眞を私どもに傳へてゐます。そこで詭辯を弄する様ではありますが、眞といふ者に二種あると、かう申すより外はないと思ひます。即ち第一は、鳥口や定規を使つてかいた様な物、即ち寫眞に寫す所の眞。それは私たちの理智の方面、或は客觀的、或は科學などから見た考へ方で、一遍私たちの頭の中で理窟をこねて判斷して見る、或は解剖して見る。例へば、あすこに花の様なものがある。それを私

たちが、ちよいと見た刹那の印象でもなければ感情でもなく、あの花は何だ、櫻か何だと言つて研究して見る。即ち言を換へて言へば、その物を分析し解剖して見て、始めて私たちがつかみ得る眞で、これが即ち科學的の眞であります。即ち美しい物までも汚い物にしてしまつて見なければ氣が濟まぬ、それでなければ眞でない。藝術家はうそ八百を言ふ者だと言つてしまふ方です。さういふ人々は、つまり一方にばかり頭が働くのでありますが、かういふ意味の眞を名づけて、科學的眞とでも申して置きませうか。即ち私たちの直覺で感じた眞ではなくして、一遍その物を殺して、さうして解剖して、頭の中でぐるぐると廻して見て、理窟をこねるのです。譬へば、水といふ物は、行く川の流とか、甘露の様な水とか言へば、誰の頭にでも端的に初から藝術的にぱつと現れる。所が科學者は、水といふ物をH<sub>2</sub>Oと解剖して、それでないければ眞でない、そんな甘露の様な水などはありはしない、その中には

端的  
あきらかに。

微菌が澤山あるに違ないと言ふのです。極度に科學的精神に支配された頭になると、どうしてもそれでなければ承知が出来ないのです。

それから先程申しました白髮三千丈式の眞を名づけて、私は藝術上の眞だと申します。即ち眞であるといふ點に於ては、前者と肩を並べて少しも劣りません。決してうそは言つてゐない、飽くまでも眞であります。即ち白髮三千丈といふのは、白髮何尺何寸と言ふのと同じだけ眞である。これは私たちの感じ、即ち私たちの直感作用に訴へるのであつて、三段論法流の理窟や、解剖や、分析の作用によらないで、端的に私たちの腦裡に眞を閃かすといふ事に依つて、表現としての眞といふ意味があるのです。理窟など言つたら、もうぶち壊しです。下手な歌詠には理窟や説明を並べて、それで歌になつてゐる積りでゐるのがありますが、あれでは本當に藝術にならないのです。

三段論法  
論理の法式  
動物は生物なり  
動物は生物なり  
動物は生物なり  
動物は生物なり  
動物は生物なり  
動物は生物なり

私どもの直感の作用、或は感じです。感情でもよろしい、それが端的に白髮三千丈と言つたり、あの人の鼻は尺八の様だと言はれて、ぴかりと私の頭の中に何物をか閃かす事が出来れば、それは表現としての眞を立派に寫してゐるのであります。

(象牙の塔を出てに據る)

一五 海の文藝

笹川 臨風

何時の時代に日本三景といふ者が選定されたかは知らぬが、三景は何れも海であつて、山は與らぬ。富士の如き東海の絶勝を有しながら、これを三景の中に加へなかつたのも不思議であるし、京都の附近には少からぬ名勝の地があるのに、一つも三景に與らぬ。吉野の花といひ、龍田の紅葉といひ、或は姨捨の月、比良や比叡の雪なども、古歌には多く詠まれてゐるが、一つとして三景の選に入つて

(一) 歴史家、評論家、文學博士。東京市の人。明治三年生。



(一)百五卷。寺島良安の著。和漢古今の百證圖羅。漢古の事項を證したるもの。

(二)六卷。藤原實照の著。歳時文學。風俗。位國郡神佛吉凶等に關する漢文の雜録。

居らぬ。瀬戸内海で一景、日本海岸で一景、東北の太平洋海岸で一景を取つたのは、地理の分布上公平であるが、東北の日本海海岸の男鹿半島をも取らず、東海の清見潟をも加へなかつたのは、必ずしも無私な觀察とは言へぬ。<sup>(一)</sup>和漢三才圖會を按ずるに、嚴島大明神の條下に「當社、後は深山、前は蒼海、左は原野、右は松原、その野の中に清水あり、御手洗井と名づく。蓋し社は山の上に在り、廻廊は平地に在り。海潮滿つる時は水廻廊を浸し、乾けば則ち干潟五十町許、無雙の絶景なり。」とある。天の橋立は拾芥抄<sup>(二)</sup>には海橋立とあるが、和漢三才圖會には龍燈の事を記せる以外、更に景色を推賞して居らぬ。松島に就いても瑞巖寺の事を記したのを外にして、景色を絶賞した事は見えぬ。橋立は往古にあつては交通の便は餘りよくなかつたが、京都と程遠くない爲に、早くから知られてゐた。嚴島は平家の尊崇が淺くなかつた爲に、これまた人の知る所であつた。松島はこの點に

止めを刺す

於て最も僻遠な地である。必ずしも三景は日本に於ける風景の平凡な者ではないが、唯三景以外に尙風景の絶勝な者がないではない。若し三景の特色を言へば、何れも海の景色であるから、煙霞搖曳し春光水に溶々たる時が最も好時期であらうが、そのうちでも、春は嚴島を推して第一とすべく、月朧に大鳥居の影を水に落し、百八の燈籠が淡く光を廻廊の裡に映じて、拍々の水が緩く廊脚を廻る風情は、自然と人工との妙を盡してゐる。夏は天の橋立に止めを刺す。朝の露がはら／＼と松の葉から零れて、砂白く水明らかに、文殊の切戸を小舟で渡つて、長風萬里より吹く松林の間を徜徉する感じはまたと得難い。松島は秋の夜の月明に八百八島の間を漕行くのを以て、最も勝れてゐるとすべきであらう。夏の松島の如きは甚だ風情に乏しい。若しそれ陰冬風寒く、白皚々の雪が玲瓏たる乾坤を作りなした時には、何れも平生の觀を一變するであらうが、窮北

の松島や、日本海岸の橋立は餘りに風流過ぎる。潮の暖い、氣候の緩やかな嚴島の雪景が、最も觀賞するにふさはしくあらうと思ふ。これを山に求めないで海に求めたのは、流石に海洋國である。我が國成生の基は、諾冊二柱の神が天の浮橋に立つて、天の瓊矛を海中にさし下して引きあげ給ふ時、その滴る潮から出來たのである。我が皇祖天照大神は、伊弉諾神が筑紫の日向の橋の小門の阿波岐原で御禊をなされ、左の御目を御洗ひなされた時に御生れなされた神である。彦火火出見尊は海神の宮に出でましてその娘を娶り、鵜鷄草葺不合尊を御生みなされた。我が建國史は絶えず海洋と密接な關係をもつてゐる。大祓の祝詞には、大津邊にをる大船を舳解放ち、鱸解放ちて、大海原に押放つ事の如く、略かく持出でて往なば、荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會にます速開都比咩といふ神持ちかゝ吞みてん云々」と言ひ、祈年祭の祝詞には、青海原は棹

(一)第四十代天武天皇の皇子長親王の孫で、栗田王の子。

舵干さず、舟の鱸の至り留る極み、大海原に舟滿ちつゞけ。」と言ひ、何れも海洋文學の香を漂はせてゐる。萬葉集には海洋に關した歌が少からずある。長田王の

あし北の野坂の浦ゆふなでして

水島にゆかん浪たつなゆめ。

柿本人麿の

たまも刈るみぬめを過ぎて夏草の

野島がさきに舟ちかづきぬ。

あらたへの藤江が浦にすゞき釣る

あまとか見らん旅行くわれを。

あまぎかるひなの長道をこひくれば

明石の門よりやまと島見ゆ。

山部赤人の「和歌の浦に潮みちくれば」の類を擧げると、僕を更ふる

僕を更ふ

も盡きない。十分に海洋の大波濤の壯を詠んだ物は見えないが、海洋その物を會得してゐたには相違ない。平安時代になると、山に包まれた小天地の間に多くその一生を送つたが爲に、文藝も次第に海洋と縁が遠くなつた。藝術に於てもまた海洋を描き波濤を寫した物は非常に少い。好んで京洛地方の山水を描く事はあるが、渺茫たる海や、洶湧する波を描いた物は、容易に探して求める事は出来ぬ。平家の晩年は海洋と淺からぬ縁故があつたが、文藝に於ては絶えて現れて居らぬ。舊都の月であるの、嵯峨野の秋であるの、大原の露であるのと、平家物語の中に哀傷を盡した物は、多く京洛若しくはその附近に止つて、一の谷といひ、屋島といひ、壇の浦といひ、平家と海洋との關係音ならざる物があるのに、割合に絶好文辭を留めて居らぬ。著者が今少しく海洋に興味を有して居つたならば、波濤の壯絶と末路の悲絶とを巧に配合して、いかに平語をして一層精

彩あらしめた事であらう。屋島の曉風殘月、壇の浦の落日暮雲は、いかばかり凄壯であつたであらう。またこれを鎌倉期に於ける土佐派の妙手が繪卷に描いたならば、波濤の美觀は更に一層の悲壯美を加へたであらうに、これ等の畫のないのは、惜しむべき事である。

一六 古事記より

太 安萬侶

(一) 和銅四年(一三七一)九月三日、古事記撰進の詔を受け、翌年正月成つて奉呈した。後、氏長者、民部卿となし、養老七年(一三三三)歿した。

伊邪那岐大御神詔りたまはく、吾はいなしこめしこめき穢き國に到りてありけり。故、吾は(大御身)のはらひせな。と詔りたまひて、筑紫の日向の橋の小門の阿波岐原にいでまして、みそぎ祓ひたまひき。

こゝに左の御目を洗ひたまひし時に成りませる神の御名は天照大御神。

次に右の御目を洗ひたまひし時に成りませる神の御名は月讀命。

次に御鼻を洗ひたまひし時に成りませる神の御名は建速須佐之男命。

この時伊邪那岐命いたくよろこばして詔りたまはく、吾は御子生み、て生みの終に、三柱の貴子得たり。」と詔りたまひて、やがてその御頸珠の緒ももゆらに取りゆらがして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、「汝命は高天原を知らせ。」と事よさして賜ひき。故、その御頸珠の名を御倉板舉之神とまをす。

次に月讀命に詔りたまはく、「汝命は夜の食國を知らせ。」と事よさしたまひき。

次に建速須佐之男命に詔りたまはく、「汝命は海原を知らせ。」と事よさし給ひき。

高天原  
事よさす

夜の食國

故、おのもくよさしたまへる御言のまに、知ろしめす中に、速須佐之男命よさし給へる國を知らさずて、八拳鬚胸前に至るまで哭きいさちき。その泣きたまふ状は、青山を枯山なす泣きからし、河海はことく、に泣きほしき。こゝをもて、悪神の音なひ狭蠅なす皆わき、萬物の妖ことく、におこりき。

根の堅洲國  
神逐に逐ふ

故、伊邪那岐大御神、速須佐之男命に詔りたまはく、「何とかも汝は事よさせる國を知らさずて哭きいさちる。」と詔りたまへば、まをしたまはく、「僕は母の國、根の堅洲國にまからんとおもふが故に哭く。」とまをしたまひき。こゝに伊邪那岐大御神いたく怒らして、「然らば汝この國にはな住みそ。」と詔り給ひて、乃ち神逐に逐ひたまひき。故、こゝに速須佐之男命のまをしたまはく、「然らば天照大御神にまをしてまかりなん。」とまをしたまひて、乃ち天にまゐのぼります時に、山川ことく、に動み、國土みなゆりき。



赤賀賀知  
赤賀賀知  
赤賀賀知

それ來ぬべき時なるが故に泣く。とまをす。その形はいかさまにか。と問ひたまへば、それが目は赤賀賀知なして、身一つに頭八つ、尾八

つあり。またその身にこけ、また檜すぎ生ひ、その長さ谿八谷、尾八尾をわたりて、その腹を見れば、ことごとくにいつも血あえた。それたり。とまをす。



肥の河上(片岡古城筆)

かれ速須佐之男命その老夫に、これ汝の女ならば、吾に奉らんや。と詔りたまふに、かしこけれども御名を知らず。とまをせば、吾は天照大御神のいろせなり。かれ今天より降りましつ。と答へたまひき。こゝに足名椎、手名椎の神、しかまさばかしこし、奉らん。とまをしき。かれ速須佐之男命、乃ちその童女を湯津爪櫛に取りなして、御み

八塩折の酒  
酒を醸み、また垣を作り廻し、その垣に八つの門を作り、門ごとに八つのさずきを結び、そのさずきごとに酒船を置いて、船ごまへるまゝにして、かく設けそなへて待つ時に、かの八俣遠呂知、まことに言ひしがごとく來つ。乃ち船ごとにおのも、頭を垂れて、その酒を飲みき。こゝに飲みゑひて、皆伏しねたり。

づらにさゝして、その足名椎、手名椎の神に告りたまはく、汝だち八塩折の酒を醸み、また垣を作り廻し、その垣に八つの門を作り、門ごとに八つのさずきを結び、そのさずきごとに酒船を置いて、船ごまへるまゝにして、かく設けそなへて待つ時に、かの八俣遠呂知、まことに言ひしがごとく來つ。乃ち船ごとにおのも、頭を垂れて、その酒を飲みき。こゝに飲みゑひて、皆伏しねたり。

乃ち速須佐之男命、その御佩せる十拳劍を抜きて、その蛇を切りはふりたまひしかば、肥の河血に變りて流れき。故、その中の尾を切りたまふ時、御刀の刃毀けき。怪しとおもほして、御刀のさきもちて、刺しさきて見そなはし、かば、つむがりの大刀あり。故、この大刀を取らして、異しき物ぞとおもほして、天照大御神にまをし上げたまひき。こは草那藝之大刀なり。

(一) 島根縣大原郡海潮村の域内。

或は、  
宮船、  
やへがきつくる  
そのやへがきを

(一) 詩人、評論家。  
名は昌治。新  
潟縣の人。明  
治十六年生。

故、こゝをもて、その速須佐之男命、宮造るべき地を出雲國に求ぎ  
たまひき。こゝに須賀の地に到りまして詔りたまはく、吾こゝに來  
まして、我が御心清々し。と詔りたまひて、そこになも宮作りてまし  
ましける。故、そこをば今に須賀とぞいふ。

この大神、初め須賀の宮作らし、時に、そこより雲立ちのぼりき。  
かれ御歌よみしたまふその御歌は

やくもたつ 出雲やへがき つまごみに  
やへがきつくる そのやへがきを。

一七 古事記を通じて見た我が

祖先の生活

(一) 相馬 御風

我々の祖先の最も力ある生活を後世の我々に示す物は、ひとり  
古事記並びに日本書紀あるのみである。殊に古事記にあつては、徹

潤飾

頭徹尾、潤飾なき日本民族その物の生活の記録である。その史實上  
の價値はどうであつても、とにかく我等の祖先の生活全體が、かの  
古事記一卷に表象化されてゐる事だけは、疑ふわけには行かぬ。そ  
して我々日本民族の生活史の殆ど全部を包んでゐると言つても  
いゝ程な、かの佛儒二教の空氣の全然混じてゐない我が民族の記  
録は、唯これあるのみである。この點に於て、我が日本民族に取つて  
最も尊い、そして最も廣く、最も深く讀まれ味はるべき書物は古  
事記である。古事記は實に、我等日本民族の生活の源であると思ふ。  
古事記を讀んで我々の感ずる所の物は、唯偏に生きんとする人  
間の力である。あらゆる物を自己の生活に統一しようとする努力  
である。彼等は人間の生活を離れた自然を觀なかつた。彼等は人間  
を離れた神を認めなかつた。彼等の觀た自然は人間生活の一部で、  
彼等の認めた神は人間の生活力の象徴であつた。彼等の身にまと

ふべき衣の材料を彼等に供給する蠶も、彼等の生命を繋ぐべき稲も、粟も、小豆も、麥も、大豆も、皆悉く彼等と同じ人間の肉體から分化して出た物と觀た。それ程までに彼等は人間の生活を擴大してゐた。彼等の眼中には、人間の運命の最後は死でなくして、發展極りなき生であつた。死の國にある伊邪那美命が、汝が國の人草、一日に千頭絞りに殺さん。」と言はれたのに對して、生の國にある伊邪那岐命は、「汝さし給はば、我はや一日に千五百産屋立ててん。」と答へられた如きは、最もよくその間の消息を傳へてゐる。殊に古事記一卷を通じて、熱烈な生の力が飽くまでも死の力と戰つて、それにうち勝たう、それを脱出しようと悶えてゐる事實が、到る所に書かれてゐる事は、最も注目すべき事である。後世の日本人に見るが如き、死に對してひたすら悲しむ様な態度は、少しも見えない。死に對して悲しみ歎きは、てはあきらめる様な事は、我等の祖先にはなかつた。彼等の

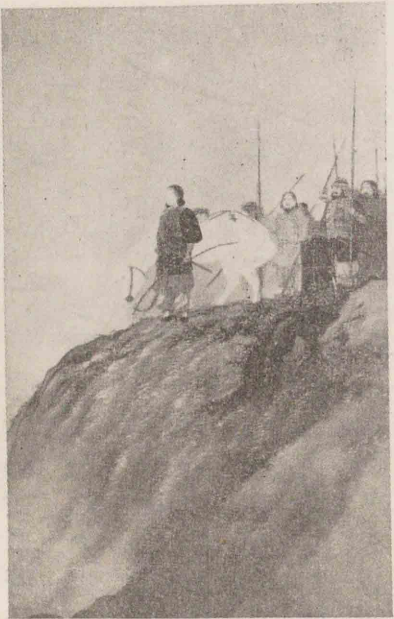
死に對して悲しみ歎く感情は、常に一轉して、死に對する憎惡の念となり、挑戦の力となつた。彼等は死といふ事實に對して、あきらめる代りに戰つた。彼等はいかなる境遇にあつても、常に生きん事を欲した。生きようと努力した。彼等の生の欲求は、死をも生と變へなければ止まなかつた。

次に我等祖先の神は、人間の生活力の象徴である。實際我々の祖先くらゐ、何にでも神といふ尊稱をつけた民族は他にない。さうかといつて、他の未開の民族に見る様な多神的でもなく、また野蠻な自然物崇拜でもない。神はすべて人間であつた。威力を有する人間が即ち神であつた。随つていはゆる敬神の念には、救濟を祈る様な分子はなかつた。敬神は唯肉身の源生命の源たる祖先に對する崇拜に過ぎなかつた。神を以て人間に對する絶對的の主權者とは思はなかつた。敬神は強大な人格に對する讚美と、自己の生命の源に



對する讚美とに外ならなかつた。祈念はまた常に幸福本位であつた。我を捨てて神にすがるといふよりは、私の生活の幸福に對する神力を希ふに外ならなかつた。要するに、神は生活の主權者ではなくして、自己の生活力の擴大された象徴に過ぎなかつた。この生の發展、生の擴大といふ所に鞏固な基礎を有する我等の祖先の敬神觀念は、他面に於てその念力に逆らふ所の物の衰滅を信じた。

偏に生活の發展と擴大とを意志とした我等の祖先の生活は、隨つてまた非常に努力的なものであつた。境遇に屈する事を知らぬその生活は、常に意志その物の悲劇であつた。我が國の文藝的產物で、悲痛な生活意志の發現を見得るものは、古事記を措いて他にないと言つてもよいからである。この點に於て最高な意味の悲劇的人格は、我が國の歴史中、古事記以外にはこれを求め得られないと思ふ。



(筆風草野長)やはまづあ

古事記中に書かれた數多ある悲劇的人物の中で、最も我々の心を引くのは日本武尊である。尊はいかなる難事をもし遂げて、自分の力を發展させようとした。自分の事業の爲には、最愛な后弟橘比賣命をも眼前で犠牲とするに躊躇しなかつた。それでゐながら、尙尊はその妻を慕うては、阿豆麻波夜の歎聲を禁じ得なかつた。かくて尊はあらゆる困難と戦ひ、あらゆる危険を冒して、東北地方平定の大任を一步々に果した。自己の苦しい境遇を知りながらも、尙自己の努力を惜しまなかつた。しかし、その運命は遂に不幸なものであつた。いかなる強敵に對しても挫けな

つた尊も、病氣には敵し得なかつた。東北討伐の大業を果して都へ歸る途上、尊は終に伊勢でこの世を去られてしまつた。我が心、恒は虚をも翔り行かんと念ひつるを、今我が足え歩まず、當藝斯の形に成れり。」と言ふ尊の歎聲には、實に悲壯な響が籠つてゐる。歩一步に疲れて衰へ行く病軀をよろめき運びながら、絶えず故郷なる大和の國をこふる歌を歌はれた。歌ひながら終に斃れられた。就中

いのちの

またけんひとは、

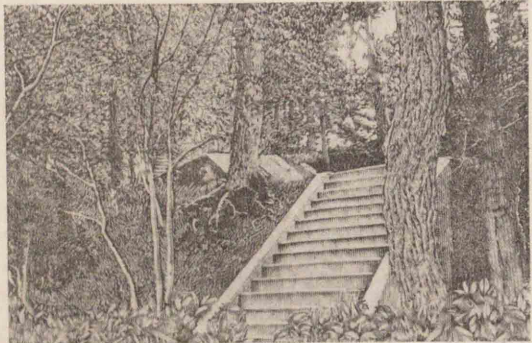
たゝみごも

へぐりのやまの

くまがしがはを、うずにさせそのこ。

といふ歌の如きは、最もよく尊の生を愛せられる心の熱烈であつた事を示してゐる。身は逆境にあつて、旅に斃れようとしながらも、尙且命の全からん故郷人よ、汝等の命の全からん限りは、隠白禱の葉を頭に飾つて、楽しく面白く遊べ。」と歌ふ。これを後世の死を悲し

み、運命を恨む數多の人々の歌と比べて見ると、當時の人々の生活に對する心持の、いかに積極的であつたかに驚かれるではないか。



能 褒 野 墓

更に驚かれる事は、日本武尊が薨去の後、大きな白鳥と化して、所定めず、行方知れず、天翔り行き給うた事である。御子たちが哭き叫びながら慕ひ追ふのを顧ずして、かの大きな白鳥は野より海へ、海より山へ、山より海へと、天翔り天翔りし、最後はその行方をも知られなかつた。白鳥の止る毎に造られた幾つかの御陵は、遂に日本武尊が最後の住家ではなかつた。御陵はすべて空虚な外形のみで、日本武尊その人の生命は、遂に止る所を知らなかつた。發展極りなき日本武尊の生命は、結局墓を脱れ、生ける白

鳥となつて天翔り行く生命であつた。

この日本武尊の生涯の様に、雄々しい努力に充ちた生活は、我が國の歴史に於ては、殆ど他に求められない。日本武尊の生涯は、一刻も休なき努力の生涯であつた。

いかなる境遇にあつても、尊の強烈な生活力は、常に外に向つて發展した。この偉大な生活の發展力の向ふ所、尊はいかなる敵とも戦ひ、いかなる敵をも倒さねば止まなかつた。尊は自ら知れる逆境裡にあつて、死に瀕しながらも、尙聲を揚げて生を讚美する歌を歌つた。尊は死しても尙墓の暗闇を脱れて、天翔り天翔つた。かくの如く最後までも熱烈な生の力の充ち満ちた生涯が、我が國の文藝的産物中、古事記を措いて他のどこに見出し得られようか。尊を通じて感じられる我等の祖先の生活その物に對する心持が、いかにも我々には慕はしいのである。人間の生活意志その物の悲痛な發現

は、我が國の藝術的産物中、ひとり古事記に於てのみ見られると思ふ。

外に向つて最近著しい國家的發展をなし來つた我が日本民族は、內的方面にもまた最近著しく革新的徑路を歩みつゝある。無論それには外國思想の影響が多分にあるのだが、しかし、大體から見ると、從來の消極的思想に對する新たな積極的思想の勃興と見て差支なからう。長い年月の間續いて來た我々民族の消極的生活に對する新しい生活慾の勃興、その生活全體の革新の過渡期、それが現今の我が文藝界を中心とした思潮の状態ではなからうか。かう考へて見て、更にかの古事記時代に於ける我々祖先の積極的生活の空氣を味はつて見ると、我々には一種堪難い憧憬の念が湧くのを覺える。

—黎明期の文學—



(一)海士どもの言葉

る様にて、日も暮れにけり。  
やうく風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、この御座所のいとめづらかなるも、いとかたじけなくて、寢殿にかへし移し奉らんとするに、焼けのこりたる方もうとましげに、そこの人の踏みとゞろかし惑へるに、御簾なども皆吹散してけり。夜をあかしてこそはとたどりあへるに、君は御念誦し給ひて、思しめぐらすに、いと心あわたゞし。月さし出でて、潮の近く満ち來けるあともあらはに、なごりなほ寄せかへる浪荒きを、柴の戸押しあけて詠めおはします。近き世界に、物の心を知り、來し方行くさきのことうち覺え、とやかくやとはかゝしう悟る人もなし。あやしき海士どもなどの、貴き人おはする所とて、集り参りて、聞きも知り給はぬ事どもをさへづりあへるも、いとめづらかなれど、え追ひも拂はず。この風今暫しやまざらましかば、潮のぼりて残る所なからまし。神の助おろか

(二)住吉の神を指す

(三)桐壺の帝、光源氏の亡き御父

ならざりけり。といふを聞き給ふも、いと心細しといへばおろかなり。  
海にます神のたすけにかゝらずば  
しほの八百會にさすらへなまし。  
ひねもすにいりもみつる風のさわぎに、さこそいへ、いたう困じ給ひにければ、心にもあらずうちまどろみ給ふ。かたじけなき御座所なれば、たゞ寄りお給へるに、故院のたゞおはしまし、さまながら立ち給ひて、などかく怪しき所にはものするぞ。とて、御手を取りて引立て給ふ。住吉の神のみちびき給ふまゝに、はや船出して、この浦を去りね。と宣はす。いと嬉しくて、かしこき御影に別れ奉りにしこなた、さまぐ、悲しきことのみ多く侍れば、今はこの渚に身をや捨て侍りなまし。と聞え給へば、いとあるまじきこと。これは唯いささかなるものゝむくいなり。我は位にありし時あやまつことなか

りしかど、おのづからをかしありければ、その罪を終ふる程いとま  
 なくて、この世をかへりみざりつれど、いみじき憂に沈むを見るに  
 堪へがたくて、海に入り、渚にのぼり、いたく困じにたれど、かゝるつ  
 いでに内裏に奏すべきことあるによりてなん、急ぎのぼりぬる。と  
 て、立去り給ひぬ。飽かず悲しくて、御供にまゐりなんと泣入り給ひ  
 て、見あげ給へれば、人もなくて、月の顔のみきら／＼として、夢の心  
 地もせず、御けはひとまれる心地して、空の雲あはれにたなびけり。  
 年頃夢のうちにも見奉らで、こひしうおぼつかなき御さまを、ほの  
 かなれどさだかに見奉りつるのみ、面影に覚え給ひて、我かく悲し  
 みを極め、命つきなんとしつるを、助けに翔り給へるとあはれに思  
 すに、能くぞかゝる騒ぎもありけるとなごりたのもしう、嬉しと覺  
 え給ふ事限りなし。胸つとふたがりて、なか／＼なる御心まどひに、  
 うつゝの悲しきこともうち忘れて、夢にも御いらへを、今少し聞え

ずなりぬることと、いぶせさに、またや見え給ふと、ことさらに寝入  
 り給へど、更に御目もあはで、曉方になりにけり。——源氏物語——

一九 都がへり

紀貫之

一 別離

(一) 九日つとめて、大湊より那波の泊をおはんとて漕出でけり。これ  
 かれ互に國の境のうちはとて、見送りにくる人あまたが中に、藤原  
 言實ときざね、橘季衡、長谷部行政等なん、御館より出で給ひし日より、こゝか  
 しこに追ひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志  
 は、この海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて行く。これ  
 を見送らんとてぞ、この人どもは追來ける。かくて漕行くまに、  
 海のほとりに留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にも  
 いふことあるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれどこの

一 平安時代の歌人、文學者。天安九年（一〇六九年）歿した。○慶長出帆。佐國長岡郡の港。今不詳。  
 (三) 同國長岡郡の港。今不詳。  
 (四) 同國安藝郡にある。今は奈半利町といつてある。  
 泊をおふ

(一)今の香美郡赤岡町。

うれ

思へらず

歌を獨言にしてやみぬ。

おもひやる心は海をわたれども

ふみしなれば知らずやあるらん。

かくて宇多の松原を行きすぐ。その松の數いくそばく、幾千年經たりと知らず。本ごとに浪打寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るにたへずして、舟人の詠める歌、

見わたせば松のうれごとすむ鶴は

ちよのどちとぞ思ふべらなる。

とや。この歌は所を見るにえまさらず。

かくあるを見つ、漕ぎゆくまに、山も海もみな暮れ、夜ふけて西東も見えずして、天氣のこと楫取の心にまかせつ。男もならはぬはいとも心ぼそし。まして女はふなぞこに頭をつきあてて、音のみぞ泣く。かく思へば、舟子楫取はふなうた歌ひて、何とも思へら

ず。

二 海 路

十六日。風浪やまねば、なほ同じ所にとまれり。たゞ海に浪なくして、いつしか深崎といふ所渡らんとのみなん思ふを、風浪ともに止むべくもあらず。或人のこの浪たつを見てよめる歌、

霜だにもおかぬかたぞといふなれど

なみのなかにはゆきぞふりける。

さて舟に乗りし日よりけふまでに、二十日あまり五日になりにけり。

十七日。曇れる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろければ、舟を出して過ぎゆく。このあひだに雲の上も、海の底も、同じ如くになんありける。うべも昔のをのこは、

棹はうがつ波の上の月を。

(一)今の安藝郡室戸町。

曉月夜

(二)「棹穿波底月、  
紅壓水中天。」  
(買島)

舟はおそふ海のうちの天を。

とはいひけん聞きさしに聞けるなり。或人の詠める、

水底の月のうへより漕ぐふねの

さをにさはるは桂なるべし。

これを聞きて或人のまたよめる、

かげ見れば波の底なるひさかたの

空こぎわたる我ぞわびしき。

かくいふあひだに、夜やうやく明行くに、楫取等黒き雲にはかに  
出で來ぬ。風も吹きぬべし。御舟かへしてん。といひてかへる。このあ  
ひだに雨降りぬ。いとわびし。

三 都がへり

十一日。雨いさゝか降りて止みぬ。かくてさしのぼるに、東ひんがしの方に  
山の横ほれるを見て人に問へば、八幡(二)の宮といふ。これを聞きて、喜

(一)承平五年二月十一日。  
横ほる  
(二)石清水八幡宮。

(一)京都府(山城國)乙訓郡大山崎村

(二)山崎の橋の西にあつたといふ。  
とかく定むることあり

びて人々拜み奉る。山崎(一)の橋見ゆ。うれしきこと限りなし。こゝ(二)に相  
應寺のほとりに、暫し舟をとめて、とかく定むることあり。この寺  
の岸のほとりに柳多くあり。或人この柳の影の川の底に映れるを  
見て詠める歌、

さざれ浪よするあやをば青柳の

かげのいとして織るかとぞ見る。

十六日。けふの夕つ方、京みやこへのぼるついでに見れば、山崎のたなな  
る小櫃の繪も、まがりの法螺かたの形もかはらざりけり。賣る人の心を  
ぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂(三)にて人あるじした  
り。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、くる時ぞ  
人はとかくありける。これにもそれにも、かへりごとす。

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。  
桂川月の明きにぞ渡る。人々のいはく、この川飛鳥川にもあらねば、

(三)乙訓郡石塔寺の南。  
あるじす



淵瀬更に變らざりけり。といひて、或人の詠める歌、

ひさかたの月におひたるかつら川

そこなる影もかはらざりけり。

また或人のいへる、

天ぐものはるかなりつるかつら川

そでをひでても渡りぬるかな。

また或人の詠める、

かつら川わがこゝろにも通はねど

おなじ深さにながるべらなり。

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けてくれば、ところどころも見えず。京に入りたちてうれし。家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れた

そでひつ

志をせん

るなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみて預れるなり。さればたよりごとに物も絶えず得させたり。今宵かゝることと、こわだかにもものいはず、いとほしく見ゆれど、志をばせんとす。

さて池めいて、くぼまり水づける所あり、ほとりに松もありき。五年、六年のうちに、千年や過ぎにけん、片枝はなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。大方みな荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく思ひこひしきがうちに、この家にて生れし女子をんなこのもろともに歸らねば、いかがは悲しき。舟人もみな子抱きてのゝしる。かゝるうちになほ悲しみに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものをわが宿に

小松のあるを見るがかなしさ。



をも載せてゐる。作者には、上は天皇から下は防人の類まで、ありとあらゆる階級を網羅し、全く身分を超越した麗しい藝術の世界を繰りひろげてゐる。中でも人麿、赤人等は歌聖と謳はれ、憶良、旅人、家持を始め、額田王、鏡女王、阪上郎女など女流の粹に至るまで、千紫萬紅、歌苑の春は永へに芬香を漂はせてゐる。

政を訓んで「まつりごと」といふのは、上古以來、我が國民に祭政一致の思想が流れてゐた事を示すものである。彼等は現世の禍福を偏に鬼神の意圖にあるものと考へた。随つて爲政者はこれに祈願、祝福の辭を捧げるのを以て己の務とした。この神祇に白す詞が即ち祝詞であつた。その文辭は、五穀豐饒、惡靈退散の意を籠め、對語、對句を用ひ、また同一語、同一音を反復して、音樂的諧調と莊重な風格とを添へたものである。また天皇が庶民に對して、國家皇室の重大事を宣布し給ふ宣命といふものがあつた。宣命には天皇が國家蒼

祝詞

宣命

生の福祉を祈念し給ふ御眞情が滿ち溢れてゐる。我が國民が夙に敬神崇祖の念に篤く、團結の精神の鞏固であつた事は、これ等によつて明らかに知る事が出來よう。

漢學は應神帝の頃我が國に傳へられ、佛教は欽明帝の前後に渡來したが、やがて大陸との交通が開かれるに及んで、隣邦支那の文化は愈、我が文運の進展を促した。こゝに修史の事業も擡頭し、元明天皇の和銅五年に至つて古事記三卷の完成を見た。古事記は語部等が相繼いで語り傳へ、稗田阿禮が口傳誦した我が國開闢以來の故事を、帝が太安萬侶に敕して筆録させられたと言はれるもので、我が上代人の文學的情趣を豊かに藏すると共に、我が國民傳説の源由を尋ね、我が國草創の時代を知るべき典據として、貴重な資料である。稍後れて日本書紀三十卷が敕撰された。その全文は悉く漢文で編まれ、莊重を極めたものである。そしてこれが先進支那に

古事記

日本書紀

風土記

對する國家的對抗の意味から發案されたものである事を思へば、當時の人々の高邁な見識の程もしのばれて嬉しい。この二者は何れも文獻的價値の高いものである。地誌の始めて編纂されたのもまたこの頃の事で、諸國に命じて風土記を奉らしめられたが、現存するものは僅か四五に過ぎない。

懷風藻

この時代に渡來した漢文學は、上流の有識階級に歡迎されて漸く隆盛に赴き、漢詩文集懷風藻に非凡の才を見せて、次期平安朝の極盛期へと躍進して行つた。

平安時代

平安朝はいはゆる王朝四百年、絢爛目も眩いばかりに文藝の彩華を誇つた時代である。しかし、尙武剛健の興國的氣象が既に衰へて、優柔情弱の風を生じ、そして上流貴族社會の遊戯的官能的な雰圍氣に醞釀されて開いた王朝の文華、其所にはもう野薔薇の清楚な様を眺める事は出來ない。即ちこの時代の文學には、一般庶民階

級の生活内容は固より、その様式すら跡を留めなかつた。

漢詩文はこの時代の初期に極盛に達した。けれどもそれ等の漢詩文は支那唐朝の優麗な文學に眩惑されて、徒にその後塵を追うたに過ぎなかつた。たゞこの間にあつて、轉變を極めた自らの境涯を詩に託した菅原道眞は、獨り異彩を放つてゐる。そしてその詩は、滲み出る悲痛な感懷に、今尙人の胸を打つものがある。

奈良朝の末葉から平安朝の初頭にかけて一時衰微した和歌は、漢詩が技巧の枝葉に流れ、その無氣力を露すに及んだ頃、更生の機運に接した。しかし、固より文學は時代思潮に敏感であり、階級に忠實である。されば復活した和歌も、自ら豪奢な貴族の生活と流麗な漢詩文の手法とを承けて、これに相應する詞章を生成した。即ち古今和歌集以下、當代歌集の主潮をなしてゐる七五調がそれである。古今集二十卷は、醍醐帝の敕を奉じて、紀貫之、凡河内躬恒等が、主と

古今和歌集

千載和歌集  
山家集

神樂及び催馬  
樂

して萬葉以降の歌を集めたもので、敕撰歌集の嚆矢であるばかりでなく、その後相ついで敕撰された歌集の首位を占める權威ある一大歌集である。古今集以後當代に於ける敕撰歌集は、何れもその實に於て古今に及ばない。殊に中期以後になると、和歌は散文に文學上の霸權を譲り、自らは徒に形式に囚はれ、因襲に陥り、唯長袖者流の消閑の具として餘喘を保つに過ぎず、末期に至つて稍清新の氣が搖ぎ、千載集にその氣運を見せた。僧西行はこの頃に現れた出色の歌人で、漂泊の詩人として新境地を開拓し、その家集山家集は高雅な氣品を匂はせてゐる。

歌謠は曲節を附して朗唱し、更に興到れば起つて舞ふ所に生命がある。由來我が民族は朗唱を愛好した。そこで新たに朗唱される歌謠として發達したのが、神樂及び催馬樂であつた。この中には、おぼろげながら當時の民間に行はれてゐた俗謠を傳へてゐるもの

朗詠  
今様  
和讚

がある。それが中頃になると、漢詩の佳句に曲節を附して朗吟する事が流行し、これを朗詠と言つた。更に降ると、今様、和讚の類が生じた。今様は主として七五調を四つ重ねた詩形で、詩の一形式として後世に傳はつた。

歌物語  
傳奇物語  
竹取物語

この時代の初期に用字法の簡便な假名が發明された事は、國文學、就中散文の發達に著しい影響を與へた。假名文の用ひられたのは、略、文徳、清和兩帝の頃からであらうが、先づその初は、二つの傾向を歩む物語となつて現れた。一つは和歌の流行にはぐくまれて生れた歌物語であり、他の一つは空想憧憬の世界に醸された傳奇物語であつて、前者に屬する物には伊勢物語、大和物語等があり、後者に屬する物には竹取物語、宇津保物語、落窪物語等がある。中でも竹取は筋をもつた物語、即ち小説の最初の物で、當時の貴族生活に對する諷刺と、異國風な匂を含めた趣味ある物語である。そしてこ

土佐日記

の二つの流れは、やがて源氏物語に至つて渾然として融合した。尙初期假名文の代表としては貫之の土佐日記がある。貫之は女のものすといふ假名文に託して日記を綴り、また古今集の序文にもこれを好み用ひて、假名文の地位を高めたが、中期になると、韻文に代つて散文が文學の王座を占め、且女流文學の黄金期を現出したのである。この王朝の宮廷に繚亂として咲いた數ある才女の中に、濃艶と芳妍との二名花があつた。それは紫式部と清少納言とである。即ち源氏物語五十四帖は紫式部の靈筆に成り、たゞに平安文學の白眉であるばかりでなく、實に日本文學の至寶である。その雄大な構想が、王朝の豪華な文化を背景として、優婉繊細な文辭に綴られ、整然として展開されて行く有様は、壯大華麗な王朝の繪卷物を目のあたり見る心地がする。これと並んで、平安文學の雙璧と言はれるものは、隨筆枕草子である。これは評論に、觀察に、人物の月旦に、諷

源氏物語

枕草子

今昔物語  
榮華物語  
大鏡

刺に、清少納言の穎智奇才が遺憾なく發揮されて、隨筆の妙趣を悉く此所に收めつくしたかの觀がある。この二大玉篇を始めとして、更科日記、和泉式部日記等が各國文の妙味を競ひ、更に狹衣物語も現れたが、一度武門武士擡頭の世運に會するや、絢爛を極めた女流の文學も俄に衰退し、殿上裳裾長く曳いて、脂粉華やかな蔭に學才を誇つた女性の影も、再びこれを宮廷に見るに由なく、文筆の事はまた男性に委ねて、才媛空しく巷間に朽果てた憾がある。この頃に現れた散文の中には、奇事異聞を輯めた今昔物語と、歴史を傳へた榮華物語、大鏡等がある。しかし、榮華といひ、大鏡といひ、これ等は共に藤原氏最高の權貴、御堂關白道長の一生、望月の缺けたる事なき榮華の様々を描いた物語で、滅び行く貴族政治に送る弔鐘に過ぎなかつた。

かくて燦爛たる王朝の文化も、皇室の式微、藤原一門の失脚と相

俟つて、落日の餘映空しく、兵馬の嘶きに暮れて行くのであつた。

鎌倉時代

二一 鎌倉室町時代の文學

鎌倉は正に文藝凋落の秋を歎つ時代であつた。武人は弓箭の力を以て政權を獲得したが、筆執る術に暗く、公卿は徒に往時の榮華を夢に追ふばかりで、時代に生きる氣力がなく、庶民一般はたびたびの戰亂に疲れ果てて生活に餘裕なく、唯纔かに武家を祐けて文筆の事に従つてゐた僧侶の間に、一脈の文道が通じてゐたのを見るだけである。隨つてその作品には佛敎的色彩が多く、權勢の推移目まぐるしい世相に湧いた當代思潮と相俟つて、無常迅速報生輪廻の思想が隨所に現れてゐる。しかもかく時代の傾向にゆがめられながらも、和歌や散文の類は、尙前代の餘映を貴族の上に留めてゐた。

新古今和歌集

千載集に於て轉生の曙光を見た歌壇は、新古今集に至つて局面を轉換し、こゝに新體を確立した。即ち新たに敍景の方面に著眼してその表現に彫琢を加へ、初句切、三句切、體言止の形式を多く用ひて、詞調に新鮮味を出さうと苦心した。しかもその奥底に流れる幽玄の趣致は、著しく時代の思潮を感受したものと云はなければならぬ。新古今集は後鳥羽院の敕を奉じ、當代の巨匠藤原定家、家隆等が撰集したもので、正に古今と相呼應する整備した歌集である。この頃の優れた歌人の中に將軍實朝がゐた。彼は武門至高の顯位にありながら、しかも北條氏の掣肘を受けて、怏々として樂しまない薄倅の境涯を、纔かに詠歌三昧によつて慰めてゐたのである。その家集金槐集には、萬葉風の雄渾な表現と眞率な人間性の躍動とを見る。新古今以後、敕撰歌集は屢現れたが、何れも新古今の旗標を守るに過ぎず、朝廷の御衰微と歌壇門閥の對立とによつて、和歌

金槐集

和漢混淆文

は次第に萎微沈滞の域に落ちて行つた。内容に於て平安時代と甚だしい差異を生じた當代の文學は、形式に於てもまた新境を拓き、こゝに和漢混淆の一文體が成立した。流麗な和文と簡勁な漢文とを渾然と融合調和させたこの和漢混淆文を自由に驅使して、新たに文壇に光彩を放つたのが軍記物語である。討つも討たるゝも時の運とは言へ、源平二氏の隆替は、餘りにも遽しく咲き散つた史上の哀話である。固より榮枯盛衰の理は、たゞに源平二氏の上のみあつたのではない。昨日は人の身、今日の我が身のはかなき運命は、殊に當時の世の姿であつた。けれども源平二氏の興亡は、その背景に天下政權の興奪をもち、武人の花形を悉く登場せしめ、且場面の變化極りなく、あらゆる人世の葛藤を織交ぜた一大悲劇であつた。されば一世の視聽を此所に集め、上下全般に深い感動を與へた。この好箇の題材を文學が見捨てておく

軍記物語

平家物語

はずはない。かくて生れたのが軍記物語である。そして先づ最初に、保元物語、平治物語が現れた。前者には爲朝、後者には悪源太義平が活躍してゐる。これに次いだのは平家物語である。これこそは、春の夜の夢にも似た平家二十年の遽しい榮枯のあとを如實に描いたもので、全篇を貫くに無常觀を以てし、沈痛な詞藻に託して哀憐悲壯の情を想へてゐる。其所には華々しい戰陣の狀が傳へられ、愛別離苦の悲愁が籠められて、強く讀者の心魂を打つ。平家物語一篇は曲節を附し、琵琶に合せて愛唱された。そしてその文體は頗る流麗で、多分に韻文的要素を含んでゐる。平家物語と同じ内容を更に詳敘したものに源平盛衰記がある。しかし、これは前者の様な音樂的諧調に乏しく、文章は稍冗漫の嫌がある。また軍記物語以外のものには方丈記、十六夜日記、海道記、東關紀行、宇治拾遺物語、十訓抄、古今著聞集等がある。方丈記は正に和漢混淆文の典型で、作者鴨長明の

源平盛衰記

方丈記



佛教的厭世觀を内容とする、寧ろ一種の宗教觀を説いた評論文と言ふべきものであらう。十六夜日記は藤原爲家の後室阿佛尼の作で、繊細な筆に託して深い母性愛を漂はせてゐる。海道記は源光行の作、東關紀行はその子親行の作と傳へ、二者共に紀行文である。宇治拾遺以下の三篇は、何れも今昔物語の亞流に過ぎない。

要するに、鎌倉は佛教趣味に終始し、平安の情趣主義、官能主義の文學が衰へて、此所には靜觀主義、厭世主義の新文學が勃興したのであつた。

室町時代

鎌倉を過ぎて、世は騷亂政變が相ついで起り、文筆は全く劍槍に壓倒されてしまつたが、僧房の中には尙筆硯が保たれ、また吉野朝の忠臣等は戰塵に塗れながらも、鎧袖の陰に筆を執つて、或は大義名分を説き、或は悲憤慷慨の衷情を漏した。ついで足利氏の世には、義滿、義政が共に一代の驕奢を極めた。そして彼等が或は室町に、或

は東山に享樂した風流文雅は、延いて諸藝の發達を促し、遂に謠曲、狂言の發生を見るに至つたのである。

歌壇に於ては、新古今以後、敕撰歌集の出づること十三回に及んだが、新續古今集に至つてその跡を絶つた。これ等は何れも因襲に囚はれて清新の氣なく、唯敕撰の名に於て餘命を保つたに過ぎない。かゝる頽勢の間に獨り新銳の氣を吐いたものは新葉集である。新葉集は宗良親王の親撰にかゝり、その全篇は悉く吉野朝に孤忠を致した人々の心腸の吐露で、慷慨激越の調に満ちてゐる。しかし、歌壇全般の衰微はまた如何ともし難く、これに對立して起つたのが連歌である。連歌は平安時代に既に和歌の餘興として行はれたが、二條良基が出て法式を定めるに及んでその位置を高め、更に名匠宗祇を待つて文學的價値を深めた。前者に菟玖波集、後者に新筑波集の撰があつた。かくて久しく搢紳の手にあつた和歌も、連歌の

新葉和歌集

連歌

太平記

勃興によつて宗祇以降民衆の手に移り、やがて宗鑑、守武が出て、民衆の詩たる俳諧興隆の機運を促すに至つた。

この時代の散文には、様々な形式のものが現れた。先づ前代に引續いて軍記物の太平記がある。これはいはゆる南朝五十七年にわたる皇室多難の御有様と、南風競はざる中にあつて奮闘した忠臣の苦衷とを描いたもので、そゞろに國民の熱涙を絞らせるものがある。この外に軍記物語としてあつかふべきものに、義經記と曾我物語とがある。共に雄々しくも傷ましい物語として知られてゐる。次に歴史物語として増鏡が現れた。これは承久、元弘の二亂を中心としたもので、流麗な擬古文を用ひてゐる。また歴史物語ではないが、當面の事件、若しくはこれに關係ある事實を取りあつかつたものとして、神皇正統記と吉野拾遺とがある。前者は吉野朝の重臣准后北畠親房の筆に成り、該博な知識と朗暢な筆致とを以て、皇統の

歴史物語  
増鏡

神皇正統記

徒然草

正閏を説いた出色の史論である。後者は同じく吉野朝の侍従藤原吉房の見聞録と稱せられるもので、その悲惨な運命を悼み悲しむ心情が溢れてゐる。尙この時代の隨筆に兼好法師の徒然草がある。枕草子と共に後人に併稱されるもので、濛い色彩と、高雅な句と、饒かな滋味とを有し、その間に作者の深い宗教觀が躍動してゐる。

お伽草子

さきに連歌を生んだ文學の下尅上は、また散文にも現れ、お伽草子その他の平民文學が発生した。武士といふ特權階級に對抗しかねた庶民一般は、お伽草子の中に恣な空想の世界を求めて、わびしい現實の生活から遁れようとしたのである。

一方に平民文學の擡頭を見たこの時代には、武士階級に於ても彼等の好尚にかなふ藝能を捉へた。謠曲と狂言とが即ちそれである。謠曲は能樂の詞曲で、一種の劇文學であるが、これを大成したのは、義滿の殊遇を受けた觀阿彌世阿彌父子である。謠曲は傳説や物

謠曲

狂言

語の中から取材を求め、これに佛教的色彩を加味し、古典文學の美麗句を引用して、それを劇的に展開させたもので、多くは前後二段に分れ、筋の進展も殆ど一定してゐる。固より謠物の一種であるから、詞章だけを以てその價值を論ずる事は出来ないが、創作的立場からすれば、寄木細工の觀なきを得ない。その意味から見て面白いのは、寧ろ狂言である。狂言は能と能との間をつなぐ餘興として發達したもので、能の附屬劇とも言へよう。しかし劇的な要素は、能よりも多分にもつてゐる。狂言には、失脚した公卿を無智臆病な大名として取りあつたものが多く、滑稽と諷刺とに富み、其所に傳統の無力を嘲笑する新興武士階級の意向が窺はれる。詞も今までの文學が傳統的文辭を用ひたのに對し、これは全くこの時代の口語と思はれるものを採用して、劇文學として新境を開拓した。惟ふに、この時代は貴族文學が没落して、平民文學の勃興する過

渡期であつた。殊に應仁の亂後、世を擧げて戰亂の渦中に投じては、文運翼を收め、靈筆影を潛めて、文藝の世界は晦冥の淵に沈んだ。しかもこの闇中に微に輝く一條の光芒は、實に時代の風潮に驅られて發した平民文學誕生の曙光であつた。

二二 江戸時代の文學

遠い上代の昔から消長の波を漂はせて、絶える事なく承けて來た文學は、去來する時代文化の饒かな土壤に、心して植附けられた民族情操の美しい花である。言靈の幸はふ國として、いみじくも庶民に及ぶ藝術の光をば、先づ萬葉に見る事が出來た。素朴豪快な野に響く聲律が、やがて繊細優雅の調を奏でる様になつて文學は貴紳の手に收められ、その後、或は武弁に、或は圓頂に、その所在を轉々する事はあつたが、遂に庶民には還らなかつた。然るに江戸時代に

入るや、止め得ぬ庶民の雅懷は、決然堰碍を破つて進り、こゝに衆庶偕に文學の滋潤を回復する事が出來たのである。

久しく暗雲に覆はれてゐた文運は、家康の治國策に端を發して、その政治組織の確立と共に、官儒設定、典籍蒐集、古書印行等が行はれるに及び、ひたすら復興の一路をたどつた。傳習的氣風のうちに、も、平民階級擡頭の兆は漸く色を加へて、既に文學にも移動の微光を見たが、この頃は唯次代に飛躍する爲の温床であつたに過ぎない。前代を繼いだ俳諧は、松永貞徳に法格が定められて貞風が流行したけれども、やがてその形式、内容は、徒に煩雜陳套に陥つた。そして西山宗因の檀林派の出現を招いたが、その奔放な句法と内容とは、よく士民の好尚にかなつて、こゝに新文學の根柢を築いた。しかし、短歌は未だ眠り、假名草子は小説として尙稚拙の域を脱しない。偃武以來既に百年、幕政は愈々堅固を加へ、吹く風枝も鳴さぬ太平

貞風

檀林風

元祿文學

平民文學

正風

の世運に、華やかな元祿時代は描き出された。華奢に赴く世相のうち、武家は漸く軟弱の風に染み、平民は豊かな黄金を擁してその勢力を強めて行つた。かくて平民階級の向上は、おのづから町人文化を形成して、上流文化に追隨する姿態を備へるに至つた。されば儒學、國學を背景とする上流文學と、新たに町人の生活を基調とする平民文學とが對立し、共に影響しながら展開して行つた。

綱吉の漢學尊重から多くの學者文豪が出たが、その中に和漢混淆文に新境を拓いた者のあつたのは注意したい。和歌には下河邊長流、僧契沖が秀で、北村季吟も聞えたが、何れも堂上趣味を出てゐない。ひとり戸田茂睡は二條派の歌論を破つて、逸速く復古を唱道した。一方檀林派末流の弊は放膽的地口の形骸に落ち、文字の遊戯に一切の生氣を失つた。江戸に下向した松尾芭蕉は、この情勢の中に高く「幽玄」の思想をかゝげた。幽玄の趣致は既に平安鎌倉に唱へ

奥の細道

られてゐるが、しかも尙その完全な文學化を見なかつた。それが彼に至つて、禪的悟了を基礎として、直ちに自然と合一する眞の幽玄相が示されたのである。旅を好んで全國を行脚し、心ゆくまで自然の閑寂に親しんだ彼は、多くの逸品を生むと共に、奥の細道、野ざらし紀行等の俳文にも妙趣を發露した。かくて正風は著しく一世の視聽を聳かし、十哲を始めその門下は全國に普く、遂に俳諧の絶頂期に到達して、平民文學の爲に萬丈の氣を吐いたのであつた。

淨瑠璃

三絃の渡來は淨瑠璃に生彩を加へた。竹本義太夫は曲節に新調を創め、辰松八郎兵衛は操の名手として共に名があり、更に近松門左衛門との提携を得て絶大な人氣を博した。近松の才藻豊かな詞章は、人情の祕奥を穿ち、縦横の趣向を生み、韻律の極致を示した。その作百餘、善と惡との争闘を中心に、「國姓爺合戦」、「曾我會稽山」等の時代物を結構し、義理と人情との相尅にいはゆる世話物を脚色した

近松門左衛門

世話物

井原西鶴  
浮世草子

が、何れも元祿文學の彩華であつた。尙紀海音の「椀久末の松山」、竹田出雲の「假名手本忠臣藏」なども傑作であつた。さきの假名草子を承けて、俳諧を基調に、簡勁洒落、含蓄深い新散文を以てやがて起つたのは井原西鶴である。彼はその浮世草子に好んで社會の裏面を寫し、町人の經濟生活を描いた。寫實的傾向をもちながらも、犀利な批評に町人の意氣をこめて、武道傳來記の武家物語などから更に「日本永代藏」の町人物に移つて、その奇警、多才を謳はれた。後、彼に模した江島其磧は、興味中心の八文字舎本を出して、大いに時好に投じた。

八文字舎本

江戸文學

王城の地として長く文化の淵叢であつた京都、商業都市として夙に經濟の樞軸であつた大阪、かうした傳統の輝きを誇る上方は、元祿の頃までは尙文化の先蹤をなしてゐたが、安永、天明の交になると、上方風は漸次江戸に流れ入つた。これと前後して町人文化も

安永天明の文學

賀茂眞淵

また著しく向上した。かくして文運東遷の緒を開き、文學も次第に江戸中心の傾向を示した。

江戸座  
天明調

國學の復古思想は、賀茂眞淵の熾烈な欲求に淵源する。彼は和歌にもまた古風を唱道した。そしてその雄渾な氣魄を「賀茂翁家集」に示し、歌壇轉回の素因をなした。一方活潑な江戸氣質は、從來の正風に満足しなくなつた。そして江戸座の風に移つたが、その餘流はまた淺薄であつた。こゝに京都の谷口蕪村は所謂天明調を創め、客觀的態度を持して明瞭爽快特に自然の景物を詠じて、鬱然たる勢力を占めるに至つた。この頃別に俳文「鶉衣」を出して特色ある境地を見せた者に横井也有がある。

狂歌

されど洒脫奔放な氣風と樂天的な性情とをもつた江戸兒は、和歌俳諧の外に、より自由な新天地を求めようとした。その爲に選ばれたものが、即ち狂歌と川柳とである。狂歌は形式を短歌に藉りて、

川柳

諧謔を弄する所に快味を貪つた。既に享保の頃、大阪の鯛屋貞柳が有名であつたが、江戸人の手に渡つてからは、いはゆる江戸兒の洒脫、輕妙、諷刺、皮肉な性情をうけて大いに發達し、四方赤良、宿屋飯盛などはその縦横の機智頓才を以て世に喧傳された。川柳は雜俳の前句附から前句だけを獨立させたもので、柄井川柳がその點者として獨歩してゐた爲に、川柳點と稱した事から起つた名である。俳諧が専ら客觀的態度に偏したのを補ひ、これは事物を裏面からのみ觀察し、嘲罵詆笑、人事世相の弱點、缺陷を衝いた。柳樽は當時の江戸兒氣質を赤裸々に見せてゐる。

柳樽

大近松の後を承けた淨瑠璃は既に峠を越え、近松半二が「新版歌祭文等」を出して人氣を博したが、この頃はもう趣向にだけ偏して不調和に赴き、藝術價值を俄に低落させた。小説では、内容を怪異趣味にとり、流麗な擬古文を驅使した上田秋成の「雨月物語」が現れ、更

雨月物語

草雙子  
黄表紙

洒落本

文化文政の文  
學

花月草紙

國學

本居宣長

に江戸趣味の反映としては、平民的な草雙子が榮え、中にも黄表紙には明誠堂喜三、戀川春町、芝全交等が出て、その文學的地位を高めた。ついで多田翁、田螺金魚等の洒落本は、細微な寫生に、洗練されたいはゆる「通」の情趣を繰りひろげて、愈、平民趣味を濃厚にした。文運東漸して久しくなると共に、太平の夢もまた既に深く、文化は愈、爛熟の高潮に達した。松平定信の儒學獎勵及び國學への關心から、詩文、和歌の隆盛を見、一方經濟力の膨脹による平民生活の餘裕は、町人文學の精粹を生んで、元祿文學の盛觀を將に凌がうとする氣運を示すに至つたのである。定信は文學を樂しみ、隨筆、花月草紙に典雅な擬古文をものしたが、その方寸に出た昌平黌設置は、漢學の盛運を招き、詩文の逸材を多く出した。國學には縣門一派の活動目ざましく、本居宣長は「古事記傳」を著して古道を究明し、その門下平田篤胤は古道を以て一の宗教とした。これ等國學者の復古思

桂園風

歌舞伎芝居

想は、後年王政復古の國民的運動の根柢をなすものであつた。また彼等は歌文にも寄與する所が多く、宣長は隨筆「玉勝間」を出し、加藤千蔭は和歌に流麗の調をなして、家集に「うけらが花」があり、村田春海に「琴後集」がある。しかし、徒に古意のみを逐ふ態度に反抗したのは、京都歌壇の人々で、先づ小澤蘆庵は俗言平語を主張して、「六帖詠草」の家集を出し、ついで香川景樹は「しらべ」の説を樹てて家集、桂園一枝を遺し、桂園風は長く明治にまで及んだ。別に萬葉風の作家に僧良寛、大隈言道等がある。俳諧は洒脫な獨自の境に遊んだ。小林一茶を除いては、辛うじて天明調の遺風を傳へるに過ぎず、狂歌、川柳もその流行こそ盛でも、何等の進歩をも認められなかつた。獨り歌舞伎芝居の隆昌は操人形を全く驅逐し、櫻田治助、鶴屋南北、並木五瓶等の脚本創作が續出して、その間に潑刺とした江戸趣味を發揮した。

讀本

瀧澤馬琴

南總里見八犬傳

合卷物

滑稽本

人情本

町人の享樂的思想は底止する所がない。洒落本は正にこの反映と見るべきもので、この時潮に驅られ、一層流行して餘りにも淫靡に傾いた。されば幕府はその刊行を禁止し、作家山東京傳を處罰した。そこで彼は「本朝醉菩提」等の讀本に筆を轉じたが、概して讀本は教訓的要素を増し、瀧澤馬琴に至つて全く勸善懲惡主義となつた。儒教道德の體現に努めた彼は、また佛教の因果律、宿命説にも基づき、その博學を披瀝して絢爛の才筆を揮つた。南總里見八犬傳「椿説弓張月」等は天下を風靡した名作である。やがて讀本は黄表紙の系統を襲つて合卷物となつたが、柳亭種彦の「修紫田舎源氏」はその尤なるものと言へよう。そして一方享樂の氣風は剪除するに由なく、形を代へて滑稽本となり、十返舎一九の「膝栗毛」、式亭三馬の「浮世風呂」等が喧傳され、更に變じて爲永春水等の人情本となつて、徒に濃艶な情趣を喜ぶ様になつたのである。

江戸時代の源流は、既に室町の頃に隱見しつゝ、も遂に消えたかに見えた平民文學の萌芽を繼承したものであるとは言へ、うち續く太平の世の慈光の中に、江戸の町人みづからが、その独自の文化の響を朗かに唱へ出でたものであつた。儼乎たる階級に支配された時代の相に醞釀されて久しい武家に對する怨嗟反抗も、やがて町人自身の住むべき文境開拓の積極的な動きへと轉じて、一時に繚亂たる華を咲かせ、遂に町人道の領域は、遙かに支配者たる武家をも凌駕しようとする潛勢力をほのめかしたのである。かくて江戸の文化を飾つた平民文學の燦然たる光芒は、幕末混迷動亂の風雲を透して、遠く明治開化の黎明に接しようとする文運隆興の鍵となつたのであつた。



三三 明治以降の文學

普く國民の情操に委ねられるはずの文學は、嘗て措紳、圓頂などの壘斷のもとに著しくその範圍を狭めた事もあつたが、江戸時代三百年の新氣運に棹さし、武門の頽廢に乗じて庶民が勃興するに及んで、遂にその手に歸し、その本然の性能を逞しく發揮すべき素地が確立されたのであつた。やがて幕府が倒れて王政は古に復り、封建制度は全く崩壞した。されば明治以降の文學は、前代の潮流を承けて、更に自由な天地に麗しい羽翼を伸すべき氣運を惠まれたとは言へ、目まぐるしい社會思潮の簇出に對しては、また敏感な反映を示しながら進展しなければならなかつた。隨つて今、明治、大正の文學がたどつた徑路を顧るのには、絶えず時代と生活との轉動をこれに關聯させて、克明に考察して見る必要があるであらう。

一、胎生の時代

明治維新の大業は、惰眠に馴れた國民生活を根本から覆してしまつた。來るべき光明を孕んだ偉大な混沌のうちにあつて、人々は各與へられた自由の歡喜に酔ひながら、その生活を轉換して行つた。しかも一方に歐米の物質文明に對する禮讚の聲は徒に高く、甚だしく舊套を斥け、開化に感激して、上下匆忙のうちに日を過した。西南役後、稍國民生活が安定すると共に、自由民權の思想も次第に普及して、政治熱が昂くなつて、こゝにはゆる政治小説の出現をも見たが、主張の宣傳が主で、文學の形式をかりたと言ふに過ぎないものであつた。

歐化的風潮が漸次その度を強めて殆どその極點に達すると、これに激發されて、我が文化を急激に向上させようとする自覺が生じ、何れの分野にも「改良」の合言葉が交されて、文運振興の世運を醸した。されば文學者も從來の戲作者（ひさくしや）的態度で晏如としてゐる事が

坪内逍遙

二葉亭四迷

言文一致體

尾崎紅葉  
幸田露伴

森鷗外

出来なくなつた。この時坪内逍遙は早く「小説神髓」によつて、文學の本質は常に人生の批判にあることを教へ、心理解剖と客觀的描寫とを小説製作の二大綱領として掲げると共に、別に二「三讀當世書生氣質」を作つて、摸索時代の文壇に指導の標識を與へた。更に彼の友人二葉亭四迷は、平生耽讀するロシア文學の蘊蓄を傾けた新心理小説「うき雲」によつて逍遙の理論を確實にし、且始めて清新な言文一致の文章を試みて、現代口語文の礎石をおろした。しかし時未だ早く、文壇の主流は尾崎紅葉の硯友社一派や、幸田露伴等の元祿文學の復活運動を迎へて、井原西鶴の文章を模倣した都會趣味の世相寫實の小説が一世を風靡した。當時逍遙に對して森鷗外があり、特に外國文學の造詣と和漢文學の素養とをもつて、始めて正格な歐洲文學の翻譯を試み、また文藝及び美學に關する外國の新説を紹述して啓發する所多く、後年の新文學運動が多くこゝに萌芽し

新體詩

二、浪漫主義  
の時代

た。鷗外、逍遙はまた演劇の改革にも志し、先づ眼目を脚本に置き、前者は獨塊の戯曲と戯曲論との紹介に努め、後者に至つては沙翁史劇の翻譯、新史劇論の主張、更に「桐一葉」以下數種のいはゆる循環史劇の列作によつて、直ちに劇壇の覺醒を促した。さきに「新體詩抄」に開拓の緒を見せた新體詩も、落合直文の「孝女白菊」の歌が出るに及んで、稍新しい國語詩の體をなすに至つた。

日清役後、國民の意氣は眞に軒昂たるものがあつた。そしてこの戰役によつて起つた國民的自覺の精神は、より偉大なものへといふ抱負となつて發動した。こゝに文學も從來の小主觀的態度を脱し、現實に直面して、大膽に深刻に人生を見詰めようとする傾向を生じ、實際生活の要求から、哲學的、社會的色彩を帯びる様になつた。即ち泉鏡花、川上眉山等の觀念小説や、廣津柳浪の悲惨小説、後藤宙外の心理小説などが輩出し、更に鏡花は神祕主義に轉向したが、や

樋口一葉

がて一般の風潮は時代精神の尊重に赴いて、家庭小説、社會小説などが出現した。獨り樋口一葉は際立つた個性によつてこの間に伍し、「たけくらべ」、「十三夜」等に鬼才を發揮してゐた。また時流に超越したかに見えてゐた紅葉は「多情多恨」、「金色夜叉」等を掲げて風格を高め、露伴も「五重塔」、「風流微塵藏」等にその宗教的色彩を深めて行つた。さて、これまでの文學の根柢となつた思潮は果して何であつたか。嘗て没我的であり、拘束的であり、非個性的であつた反動として、人々の自我の權威、個性の尊嚴に想到し、ニイチエの影響を受けた高山樗牛の天才主義、本能主義に赴いた。かくて浪漫主義の風潮は著者と成長の道をたどり、文壇は靡然としてこれに共鳴したのである。されば日清役後の文學は、齊しくこの浪漫主義の色彩に彩られたものであつて、情意の解放から、奔放な情熱の泉は沸湧し、自由艶麗な想華は時を得て躍動した。美しき夢、理想の青き花。この主義の

高山樗牛

北村透谷

土井晚翠

薄田泣菫  
上田敏

落合直文

正岡子規

諧調は、西歐詩の紹介と相俟つて、詩歌に最も目覺しく現れ、豊かな詩情の展開は、著しく新分野を獲取して行つた。夙に「文學界」に據つた若き抒情詩人の一團のうち、北村透谷は哀婉または豪宕な長短の詩に未完の天才の記念を止めて夭折したが、島崎藤村は深い哀感を優雅な詞章に託して、劃期的な作品「若菜集」を生み、一方に帝國大學派の詩人は雨江、桂月等について土井晚翠が「天地有情」に豪放な調を盛つた。他方薄田泣菫、蒲原有明等の新人も擡頭し、上田敏等の鼓吹をうけて、こゝに日本近代詩は確立した。歌壇では落合直文が夙く和歌の革新を企て、淺香社を組織して與謝野鐵幹、金子薫園、尾上柴舟等を出し、更に鐵幹は「明星」に據るに及んで明らかに浪漫主義を反映したが、與謝野晶子の出現に一段と生彩を加へた。また正岡子規の根岸派では萬葉調を尙び、客觀的、寫生的態度を主張し、佐々木信綱の竹柏園派も清新な詩味を捉へようと努力して、こゝ

三、自然主義の時代

に歌壇は全く面目を新たにした。俳壇も子規が在來の月並調を排して純客觀の句を標榜し、門下の内藤鳴雪、高濱虚子、河東碧梧桐等が活躍した。かくて浪漫主義の潮流に巧に棹さして、韻文の更生革新は華やかに、且まめやかに行はれたのであつた。

日露役後の社會思潮は、詩の樂園から科學の世界へとその歩を進め、現實の核心、人生の實相を追求する様になつて、勢ひ美から眞へと轉回して行つた。幻想に身を委ね、浪漫主義に陶醉してゐた當時の人々に、この唯物的思想、實證主義的精神は、どんなに新しい感動を與へた事であつたらう。殊に泰西科學の成績と、ゾラ、モーパッサン、フロベール、ゴンクール等佛國自然派の作品とは、この轉向の力強い契機となつたのである。さきに小杉天外のゾライズムに端を發した自然主義的趨勢は、やがて國木田獨歩の「武藏野」、牛肉と馬鈴薯、藤村の「水彩畫家」、破戒、田山花袋の「蒲團」等が出るに及んで、動かす

島村抱月

夏目漱石

小山内薫

事の出來ない文藝の本流となり、これに島村抱月等の理論的立證も與つて、自然主義は漸く全分野を支配し、幾多の作家を輩出させた。この間、別途には餘裕派の夏目漱石があつて、坊ちゃん、「吾輩は猫である」等を出し、徘徊趣味の境地に遊んだが、一轉して科學的手法による心理小説に深き洞察を示し、森鷗外の新歴史小説と相並んで、後の新現實主義の刺戟となつた。劇文學は逍遙また「新曲浦島」及び「新樂劇論」を出し、實際運動として文藝協會を創立し、年來の理想に一步を進めようとしたが、新興劇壇は却つて文壇の自然主義運動と手を携へて、イプセン、ハウプトマン及びその系統の近代劇を歡びむかへ、小山内薫の自由劇壇などが進出して、活氣を見せた。文藝協會は分れて藝術座となり、幾多の新劇團となつた。詩壇にあつては、内容を現實に即せしめようとして、自由形式の運動が起り、都會詩、口語詩が生れ、短歌は浪漫主義の殘影から逃れ、現實を生命と

若山牧水  
石川啄木

して若山牧水、石川啄木等が自然に人事に各潑刺たる感情を詠出し、その派は次第に多く、根岸派の後身たるアララギ派と鼎立の勢を作つた。

四、大正の時  
代

自然主義の命脈は、明治末期を轉機として、次第に脆弱となつて行つた。固より浪漫主義の反動として興つた自然主義は、暗黒面の描寫や赤裸々な人生の究明などに意義を有したが、その無理想、無解決な態度は、決して新興大正の時代意識を満足させるものではなかつた。即ち人生の明るい希望を獲得しようとする時代の趨向は、新しい生活理想の樹立を欲したのである。かくて新理想主義は、實生活の要求に伴なつて起つたが、その淵源はオイケン、ベルグソン等の哲學思想と、トルストイ、ドストエフスキ、ロマン・ローラン等の文學思潮とにあつた。この時流に乗つて武者小路實篤、有島武郎等の白樺派は人道主義を高唱し、人間の内部生命の光を發現さ

せた。またこれに先立つて自然主義と對抗して、唯美主義の都會文學から新浪漫主義へと轉回しつゝ、あつた永井荷風、谷崎潤一郎は、一層芳醇な官能描寫の香氣を漂はせてゐた。

新現實主義の一派は、科學的觀照と、これまでの文學に缺けてゐた正確な主觀からの批判省察とを強調し、テーマを重んじ、形式に意を致した所に新進の意義があつた。その作品に現れた清新な角度からの把握や、伶俐な素材の選擇などは、蓋し大きな進歩であらう。菊池寛、芥川龍之介を中心に各その持味を異にしながら、大部分の作家はこの主義の捧持者であつた。しかし世界大戰を機として、社會改造の思潮は俄に一般に浸潤し、従來箇々に局限されてゐた生活の様式は、一齊に社會化されて來た。この時流に目覺めた人々は、各その思想的な立場から、著しく社會意識を文學上に闡明する様になつた。

劇文學は現實的な傾向へ進んで、こゝにも社會意識が強調され、築地小劇場その他の新劇團體が續出すると共に、作家にも幾多の俊秀が現れ、近代劇風の製作の外、映畫劇、兒童劇、舞踊、ページェントにまで新しい分野をひろげるに至つた。大衆讀書層の擴大と共に、その要求に應じた文學の頓に夥しく製作され、久しく我が文壇を支配した歐洲大陸文藝の影響に代つて、新興米國のその平俗、輕快、豪放な冒險趣味が喜ばれる事も注目し値する。詩壇には自由詩、口語詩の大成を見、また民謡、童謡も新機軸を生むに至り、俳句も和歌も新形式へと進み、結社主義が全盛を極め、總じて韻文の世界もまた華やかなものがあつた。

明治、大正の文學を通觀する時、我々日本人が眞に撓むことのない歩行を以て、彈力のある旺盛な生命力を發揮した跡に驚かざるを得ない。當初極めて稚拙であつた搖籃時代から逐次發展した明

治以降の文學は漸くその價值を高め、遂に世界文學に伍してなほ燦然たる光彩を放つに足る成果を示すに至つたのである。かくて先人の努力は、向後の俊敏な文化活動に参加し得る可能性を我々に授けてくれた。しかも文化の無限な展開、生活の無窮な進化は、今更説くまでもない。されば次代の國民たる我々に賦課されるものは、果してこの有利な文化的地位を如何に我々が向上させるかといふ、民族としての責務と努力とであらう。

ちよりのついで  
あつたまへ  
男五尺のついでして同籍へあはる

國文 卷十終

浦野製

昭和六年二月十八日印刷  
昭和六年二月二十二日發行  
昭和六年十月九日訂正再版印刷  
昭和六年十月十二日訂正再版發行

國文 附  
新制第一版

著者 富山房編輯部

版權所有



發行兼印刷者 富山房

代表者 坂本嘉治馬

印刷所 富山房印刷部

同所合資會社富山房社長  
東京市小石川區音羽町七丁目六番地

定價  
自卷一至卷八  
各金六拾錢  
卷九・十  
各金五拾九錢

發行所

東京市神田區  
通神保町三番地

合資會社

富山房

電話神田一四四六一一四四九番  
振替口座東京五〇一四番

